

---

# 黒き征裁

い～ちゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒き征裁

### 【Zマーク】

Z7984A

### 【作者名】

いーちゃん

### 【あらすじ】

世界中が戦争中！……そんな世界に生まれた少年が仲間と共に成長していくファンタジー！……知られざる漣亮の過去とは？？『元チーム』との対決は？？とにかく読まなきゃ損！……今すぐこの世界に旅立とう！！！

## プロローグ（前書き）

少しでも興味を持つて下さった方に感謝します。  
初めての小説ですので我が子を見守る様な気持ちで読んで下されば  
幸いです。  
最後までよろしくお願いします。

## プロローグ

この世界は汚れている。

完全なる弱肉強食の世界だ。

その風習は学校教育の場にもおよんでいる。

戦争で勝つ為に、人を殺す為に……その為に俺達は学校で戦う技術を学んでいるのだ。

もちろんこんな世界が嫌じやない訳じやない。

こんな世界は嫌いだ。

だからと言つてたかが1人の高校生が騒いだとこりで何も変わりやしない。

俺はそんな建設的じやない事はしない。

人の人生なんてたつた100年だ。

今は戦争のおかげで平均寿命が男女共に30代だ。

あと20年もない人生なんざの為に頑張つて生きて行こうなどとも思わない。

あと少しだけ…我慢するとしよう。

## 第1話・転校生

西院学園……今日、俺が転校する学校の名前だ。

ちなみに今日の朝は俺の17年的人生な中でたぶん4番目ぐらいに悪かった。

昨日、夜遅くまで引っ越しして来たばっかのアパートにあった荷物の整理をしていたせいだ。

転校ギリギリに引っ越しするもんじゃないって事が今日わかった。今さら言つても仕方ない事を頭の中で思いながら俺は歩いていた。学校まで片道15分、ちなみに今は8時15分、まあ走ったところで間に合つ訳じゃない。

転校初日に遅刻と言つ漫画の世界の出来事の様なイベントを成し遂げた俺の名前は……、それはまあもう少し後からしよう。

結局、学校に着いたのは8時30分だった。  
けつじゅうはや歩きしたんだけどな……。

職員室で生活指導の教員とたまたま授業のなかつた学年主任に怒られた後、俺は教室に向かった。

後ろのドアから入ると……まあお決まりのパターンだ。  
ちょうど担任の授業だつた様で今から朝学活にやるはずだつた俺の自己紹介をする事になつた。

「今日、転校して来た漣亮さきなみりょうです。えーと、まあよろしく。」  
いたつて普通、常識的かつ善良な挨拶だ。

好戦的な視線とそうじゃない視線とがいりまじつた視線が俺に向かふられる。

「じゃあ漣くんはあそここの席に座つてくれる??」  
と右から2番目の後ろの席を指示す。

普通は転校生と初めて隣に座つた可愛い女の子が恋に落ちるつて言うお決まりなストーリーがあるはずなんだけど、残念な事に両隣共

に男だったのとそのストーリーはカットだからよろしく。

## 第2話・友達

転校初日といつ事で午前中は大した会話もなく過ぎした。

本当はこの雰囲気嫌いなんだけだな。

食堂に行けば誰かと知り合いになれるだらうと思つて食堂に行く為に立とつとすると、離れた所からなんとも愉快な会話が聞こえて来た。

「漣、だつたつけ…誘つてみようぜ。」

「あいつなかなかカッコいいから仲良くなつて女の子と知り合つてなるつて魂胆だろ？？」

「ばつ、違うぞ！…！」

「本当に違うなら食堂に案内してもらいたいんだけど。」

こつちから話かけてやつた。

この雰囲気を脱出する為にいつかは必要な行為だつたしあうびこいきつかけになつた。

「あ、聞こえた？？冗談だよ。冗談。」

と髪を茶色に染めている方の男子生徒は笑いながら自己紹介をした。

「俺は安永順一郎。順つて読んでくれ。まあよろしくな。」

「俺は上坂拓也。何て読んでくれても構わないぜ。よろしく。」

と隣にいた落ち着いた雰囲気の男子生徒も自己紹介をする。この話の流れでは俺も自己紹介しなきゃなんね～よな。

「漣亮だ。亮でいいぜ。」

まあ簡潔に……。

「で、案内してくれんのか？？」

「喜んで。食堂だけじゃなく女子トイレから女子更衣室までなんなりとお申し付け下され。」

「じゃあまずは女子更衣室かな？？」

「おー！旦那、いいチョイスではございませんか。」

いろいろ思つ事があるかもしれないけど突つ込み禁止。

「それより早く行かないと席なくなるぜ？？」

と拓也の現実的な一言で俺達は食堂に行く事にした。  
女子更衣室はまた今度案内してもいいつとでもするかな。

### 第3話・食堂

食堂は共同施設があるので男子だけじゃなく女子もいた。

今は拓也と円卓のテーブルに座つてジャンケンで負けた順が3人分の食べ物を買いに行つてる最中だつた。

「そう言えば前はどこの学校に行つてたんだ??」

「学校は行つてなかつたんだ。放浪の旅つてやつ??」

まあ格好よく言つてみたが実際はそんな格好いいものじやないけどな。

「よく編入できたなあ。すげ~じやん。」

「だろ??やつぱり拓也は話がわかるなあ。」

実際は西院の理事長が俺の知り合いだつただけだから編入試験とか

1つも受けてないけど。

「けつ!!~氣取つてんじやね~よ。」

と3人分の食べ物を持つてご機嫌斜めな順が帰つてきた。

「絶対俺の方が強えぞ。」

「拓也と順は学園でどんぐらいの位置にいるんだよ??」

スルーしてやつた。

「中の上つてとこかな??学年じや上の中かな??」

「へえ~。けつこういいポジション取つてるじやね~か。」

「男子だけだけなあ。」

と順がつぶやく。

「女子が入れば何か変わるのか??」

「上も下も倍になるくらいかな??」

「まだ俺達も正式にはわかんねえんだよ。」

口に物を詰めこんで喋るな。

「来週だつたかな??学年序列を決める大会があつたはずだからそれでわかる。」

「学年序列か??」

目立ち過ぎるのもよくないし弱すぎるのでよくないからな。  
拓也より下はまだいいが順より下は許せない気がする。

とまあ転校初日の昼休みはこれで終わった。

午後からはクラスのほとんどの生徒と打ち解けたみたいだし初日に  
しちゃ上出来だろ。

俺って対応能力抜群だなあ。なんて思いながら帰路に着くかな。

## 第4話・女子練

それからの数日は何事もなく実に充実していた。

ただ1つ足りないものと言えば女の子ぐらいだ。

男子練だから当然と言えば当然だが全く華がない。

周りの情報によると拓也にはかなり可愛い彼女がいるらしい。

裏切られた気分だ。

今までに女に困ることがなかつたから（皮肉じゃねえぞ）こういつつ時にどう対応すればいいのか困る。

つて事でお待ちかねの女子練案内を今日してくれるらしい。

放課後になり順以下約10人で俺を案内してくれるらしい。

……そんないらね～よ。

放課後になり安永順一郎プレゼンツ女子練案内ツアーリングを行つ時間になつた。

ちなみに女子練は男子練の向かい側にある。

きちんと許可を取つてあるのかとか入つて行つてもいい事になつているのかと言う不安は絶えなかつたがまあ気にしないでおこう。

「え～それでは今をもちまして女子練に侵入いたしました。」

「早くしろよ。」

「ばか……やらせろよ。」

と文句を言いつつも順は女子練に入つて行つた。

「え～、ここが2年女子の教室がある3階でござります。」

「知つてゐるよ。」

と俺以外の皆が言つ。

「俺の為の案内なんだから我慢しとけよ。」

「そう言えばそうだつたな。」

つて言つてか忘れんなよ。

「あれ？？安永？？何してゐの？？」

と、突然に後ろから声がかかつた。

「よつ。亮を……転校生を案内してるんだよ。」

「転校生??あつーー！そお言えば拓也が言つてた。」

「誰だよ??」

俺はたまらず順に聞いてみた。

「あつー！拓也の彼女の奈々原朋美です。よろしくね  
「連亮です。よろしく。」

つてか拓也の彼女かよ。可愛いじゃねーかちくしう。

「連くんつて女子練でも結構噂になつてるんだよ??カツコいい転  
校生が来たつて。」

「マジで??それは光栄だなあ。」

「……。」

後ろからかなり危うい視線を感じるけど無視しどくか……やつぱり  
無理だ。

「何だよ??」

「…そろそろ時間がないし帰るわ。」

またご機嫌斜めな順一郎君でござります。  
つて言うか機嫌が口口口口変わる奴だな。  
ご機嫌斜めな順がとつとつ歩いて行つてしまつのでびりやう俺も急  
いだ方がいいらしい。

「じゃあまたな??」んじはゆつへつ話わつば。」

「うん またね~。ばいばい。」

今度は前から睨みやがつた……。

帰り道にずっと順をなだめておく必要があつたが昨日は楽しかつた。まあ可愛い女の子とも知り合いにもなれたし…拓也の彼女だけどな。それに比べて今日は朝学校に着いたとたんに本当は女子練に勝手に入つたらダメとかいろいろ拓也から注意を受けた。どうやら朋美がしゃべつたらしい。

しかも午後からは『靈力テスト』があるらしい。

俺にしてみれば靈力って何だよつて感じなんだけどな……。

「ところであ。靈力つて何だよ??」

と切り出せたのは3時間目が終わつてからだつた。

「…………。」

「何だよその3点リーダー4文字は??」

「…………新手のネタ??」

「どうやらやつぱり聞かない方がよかつたらしい。」

「お前ほんとに編入試験受かつたのか??」

「でも戦闘学校に行つた事ないんじゃ仕方なくない??」

「でもぶつ飛びすぎだろ。」

いろいろ言いやがつて。

少しは黙れよ…こつちは軽くショックなんだよ。

つて言うか誰か説明してくれませんか!!

「亮…真剣に言つてるんだつたら今から職員室行つて来いよ。」

「そんなにあきれるなつて…………。」

「俺も行つて来た方がいいと思つ。」

だからクラス全体で俺をイジメるなよ。

「わかつたよ。わかつたわかつた!!行つて来るよ…………。」

もうヤケクソだ…………。

「何!!靈力つてなんだつて!!??」

お前までお決まりの反応かよ。

担任の井伊に

「靈力って何？？」

つて言つたとたんに叫びやがつた。

「靈力って言うのはだな……。」

これから靈力テストが始まるまで基礎からみつちり叩き込むらしい。

もつどうにでもなれよ……。

## 第6話・靈力テスト

5時間目が始まつても俺はまだ職員室にいた。

1番初步的な技はできる様になつたらしい。

俺自体は靈力を持つてゐるらしいからきちんと基礎を積めば大丈夫らしいけど今日には間に合わないらしい。

やつと解放されたのが5時間目の終わりぐらいだつた。

「で、どうだつたんだよ？？」

冷静に突っ込む拓也の隣に座る。

「1番初步的なのは使える様になつた。」

「初步的なつてあのピン球ぐらいの靈力の塊が出るやつっ？」

どうやら順は俺を徹底的にイジメたいらしい。

ニヤニヤ笑つてやがる。

「あ～！～うるせえな！！靈力なんて知らねえよ～～」

「とうとう現実逃避に走つたな。」

「じゃあ次は2年3組。」

と試験官の先生の声がかかる。

「じゃあ全員頑張つて行こう～～～！」

いつか順の奴殺してやるからな。

順番を待つてゐる間はかなり憂鬱だつた。

周りから見ればご機嫌斜めの亮君だつただろ？。

どんどん試験を終わつた生徒が出てくる。

ちなみに拓也はかなり出来らしい。

「そろそろ行つて来いよ。」

「ああ。終わつても何も聞くなよ？？順にも言つといってくれ。」

手を上げて答える拓也を後に俺は壁で区切られた試験室に入つて行

つた。

「出席番号39番の漣亮君ですね？？まずはそこに座つて下さい。」

これが俺の地獄の試験の始まりだつた。

それから制御の試験とかコントロールの試験とかいろいろあつたがまあ客観的にみて出来たとは言わないだらつ。

つて言うかボロボロ……。

結果は帰るまでにわかるらしい。

拓也のおかげで誰にも

「どうだつた？？」

と聞かれなかつたのは不幸中の幸いだつた。

その幸いもつかの間、早くも結果発表の時が来た。早すぎだつつの。

どうやら読み上げて行くらしい。

ちなみに拓也は80順は78だつた学年としてはかなり高い方らしい。

「次…漣亮！！……！」で言つてもいいのか？？

みんなの視線が突き刺さる。

「いいつスよ。」

「漣は……21だ。」

「…………。」

教室に氣まずい沈黙ができる。

「21は学年最下位だ。」

昨日、学年最下位の成績を申告されてから、さすがに順もその話題には触れなかつた。

逆に辛えつつーの。

もし自分からそんな方向に話題を持つて行くと虚しくなるだけだからしなかつた。

来週の学年序列決定トーナメントとか言つのもビリでもよくなつてきた。

こんなにブルーになつたのは初めてだ……。

ちやつかり家で練習してみたけど、部屋が散らかつただけで何の進歩もなかつた。

剣技とかなら自信はあるんだけど、靈力でガードされたらこいつダメージがはねかえつてくるらしい。

マジでブルーだ……。

「今日、拓也が奈々原と一緒に飯食つらしけ。」

今、そんな事言われてもよけいにテンション下がるだろうが。「でさ、奈々原といつも一緒にいる女の子がめちゃくちゃ可愛いのよお。奈々原より可愛いかな??」

「…………。」

あえてノーコメント。

「俺達も一緒に行かね??」

「是非行きましょう。」

テンション急上昇。

待ちに待つた昼休み。

拓也について行くともうすでに朋美達は来ていた。

「拓也ー!!」

と手を振る朋美の所へ拓也は足を進める。

「あつ！－！漣くんじゅんー..？」

と朋美の隣にいた女の子が声を上げる。

「ほんとだ。漣くんー！－！」

可愛い女の子に手を振られるのは幸せだなあ。

「初めてまして。雁原優華です。よろしくね

「可愛い…………なんつって。

「漣亮です。よろしく。」

「亮、順知らね？？」

「順？？」

つてか自己紹介し終わつたばっかなのに邪魔すんなよ。

「安永ならさつきあわせ」で曲がつたよ。それより早く食べよ。」

「そうだな。」

拓也と朋美は俺と優華の事なんかおかまいなく歩いて行く。

「今日もラブラブですねえ。」

「いつもあんななんのか？？」

「うん。…………私達も一緒に食べる？？」

「ああ。」

「ああ。」

「ええ……じゃあ漣くんて学校初めてな人なのー！？」

なんかマズイ方向に話が進みそうだ。

「じゃあ靈力テスト21点もしかたないね。」

「やつぱりかよ。

「つてか何で知つてるんだよ？？」

「漣くんは女子練じや結構有名なのです。」

「そりあ光榮だなあ。で、優華ちゃんはどうだったんだよ？？」

「一応『ちゃん』付け。

突つ込み禁止。

「私？？私、雁原優華ちゃんはなんと77点だったのですーーー。」

「マジ？？すげーじゃん。」

「わかんない事あつたら教えてあげるよ。」

今日の会話はこんな感じだつた。

可愛い女の子とも知り合いになれたし今日はいい日だつた。

昨日、順が消えた訳は

「俺が行つたらハミつただろ!」が!……

つて事らしかつた。

ナイス判断だな。

俺は帰つてから別に優華の髪がさうさらだとか、鼻筋の通つた綺麗な顔を思い浮かべたりはもうりんしてない。

……ちよつとはしたけど……。

まあそのおかげでもうすぐ学年序列決定トーナメントがある事がすっかり忘却の彼方だつた。

今さつき嫌味つたらしく順に言われたのでやつと思つ出した。

「亮つてトーナメント出れんの? ?」

「黙れ、安永。」

こんな感じの会話がかなりあつた。

どうやら他の男子共も俺がトーナメントで最悪な結果を残すと女子練での俺の噂もなくなるだろ! と思つていろいろじいつてかイジメかよッ! ! !

「靈力の使い方誰も教えてくれね~し、優華ちゃんにでも教えてもらおつかなあ。」

つて言つたらその瞬間から嫌と言つぽど無理矢理に教えてくれたけど。

「亮つて剣使うんだよな? ?」

「ああ。剣技だけじゃ負ける気しないんだけどな。」

「マジで? ?」

「ああ。試すか? ?」

「……。」

どうやらみんなで本当か審議してゐるらしい。

「本当は剣技もだめなんじゃね? ?」

「じゃあなんで編入できたんだよ？？」  
「靈力ない分補う剣技あるのかな？？」

勝手にいろいろ言いやがつて。

「明日つて休みなのか？？」

唯一審議に参加してない拓也に聞いてみた。

「日曜だからな。トーナメントは月曜からだ。」

まあ日曜日に必死に練習したところで何も変わらないだろうし靈力はあきらめるかな。

「まあ、本番になつたらわかる。」

と言つ」とで審議の結果は決まつたらし。

「1年の時は何位だつたんだよ？？」

「1年はまだ靈力がまともに使えないからトーナメントないんだよ。」

順が意味ありげな目でじつちを見る。

全くもつて不安だ。

何かいい案がないかね。

昨日の終学活でもひつたプリントに学年序列決定トーナメントの説明が書いてあつた。

男女混合でトーナメントをしていくらしい。

運も関係してくる説だ。

相手はクジで決めたらしい。

俺の一回戦の相手は『斎藤隆』って奴だつた。

靈力テストでは70だつたらしい。

クジ運悪ッ！

こんなプリント見ててもブルーになるだけだからコンビニでも行く事にした。

もうすぐ梅雨なのにすっげー晴れてる。

「あ…。」

つて言う声がしたので取り合ひず振り向いてみた。

雁原優華がいた。

「漣くんじやん。ちやお～」

「ちやお～。」

フランス語。

「何してんの？？」

「散歩かな？？漣くんこそ訓練しなくていいの？？」

何気に酷いな。

つ～か散歩かよ。

「毎日飯買いにコンビニにでも行こつかなかつて。」

「そつか、漣くん一人暮らしだつたね。」

なんとなく2人で並んで歩き出す。

「1回戦誰だつた？？」

「斎藤隆……だつたかな？？靈力70つて書いてあつた。」

「うわあ～。漣くんクジ運悪いねえ。」

「知つてんのか？？」

「うん。性格悪いので有名だよ。」

「マジでクジ運悪いなあ。」

「田頃の行いはいいハズだ……。」

「田頃の行い悪いんじゃない？？」

「……。いいハズ。」

「あはは。自分で言つなよ。」

「優華ちゃんはクジ運よかつたのか？？」

「うーん。まあ普通かな？？へマしなきゃ勝てる相手。」

「よかつたじゃねーか。頑張れよ？？」

「漣くんも頑張んなきゃダメでしょ？？」

「靈力がもつとあれば頑張れるんだけどな。」

「剣技はすごいんでしょう？」

その情報源はまた例の噂かよ。

「まあな。でも靈力がなかつたらあんまり意味ないつても。」「ん~。勝つたら」

「褒美あげるつて言つたら頑張る？？」

夢の様な提案です事。

「くれれるんなら頑張るよ。」

「じゃあ勝つたら優華つて呼ばせてあげる。」

「……。」

「あつ……自信過剰とか自意識過剰つて思わないでよ？？優華つて呼ぶ男の子一人もいないんだから。」

自意識過剰だろ……。

「褒美つて言つたらあんな事やこんな事が……つてそういうやなくて。」

「わかったよ。頑張る。」

「本当？？約束だからね」

「はいはい。」

ひょんな事で勝つ約束しちまつた。  
どうするかな。

## 第10話・学年序列決定トーナメント1

ついにやつて来ました悪魔が作った日。  
なんとこの日は晴天です。

ちなみに俺の試合は第3闘技場で3試合。  
拓也は自分の試合で来れないらしいが他のクラスメイトはほとんど  
来れるらしい。  
なんでだよ……。

無観客試合したいんですけど。

1試合目も2試合目もかなり早く終わつた。  
しかも観客がかなり入つてるんだよ……。

後で知つたけど優華と朋美がいっぱい女子生徒連れて来たらしい。  
そして俺は今死刑台……じゃなくて闘技台に上がる1-3階段……じ  
やなくて15階段を目の前にしている。

一応策はあるんだけどな。

「両者闘技台へ！！」

審判をする先生の合図で闘技台へ上がる。

歓声がするが何て言つてるかはわからない。

斎藤はニヤニヤ笑つて立つっていた。

「ルールは特にない。お互い無理はしない様に。では、始め！……」

始まつちまつたよ……死刑執行か？？

「よお。漣い、お前靈力2-1しかないんだって？？」

「……。」

余裕ぶつた顔でしゃべりやがる。

「俺は靈力7-0もあるんだぜ？？潔く降参しろよ。」

「お前なんか靈力無しでも倒せると思うから降参はやめとくわ。」

「はつ！-靈力無しで倒せるつてか？？それはこつちのセリフだろ  
うが。」

思った通り自信だけいっぴいで安っぽい挑発にも乗つてくる。

「じゃあやつてみろよ。」

「やつてやるよ！……俺はこの試合靈力を使わないぞ！……」

斎藤は高らかに宣言した。

場内に歓声が響く。

「さあ来いよ。」

靈力無いんじゃこの学園で一番ぐらいになつてやるよ。

俺は地面を蹴つた。

一気に近付いて刀を振り上げる。

斎藤はそれを腕にしていたプロテクターで受け止める。

「はつ！……そんなもんか！……」

腕にもつた剣を振り下ろす瞬間に俺は斎藤の懷に入った。

「そんなもんか。」

「すっげーじゃん。作戦勝ちだな！……」

席に戻つた俺をクラスメイトがもてなす。

「でも次はこうはいかねえぞ？？」

順も応援してくれたみたいだ。

「ま、任せとけよ。」

と勢い付いている自分に気付かながらも俺は言つた。  
次の相手は角元成美、女の子はやりにくいつだ。

## 第1-1話・学園序列決定トーナメント2

ちなみに拓也も俺の2つ後に戦つた順も難なく勝つた。  
まあ80と78なんだから当然だわ。

ちなみにさつき優華と朋美が来て、

「じゃあ『褒美あげるね』」

つて言つて帰つたので少し問題になつた。

順が試合中でよかつたとつくづく思つ。  
他のクラスメイトにはきちんと納得させたが順を納得させる自信はない。

ちなみに俺と角元成美の試合はあと5試合後だ。

優華がくれた情報によると角元成美は靈力42と低く（人の事言え  
ないけど）かなりおとなしい子らしかつた。

第1試合はクジでシードだつたらしい。

おとなしい子つて……よけいやりにくい。

元気ある女の子だつたらまだまつしだつたのに。

こりやあ俺が余裕で勝つちゃつたら女の子人気が下がるかも……つ  
てそういうじゃなくて。

とにかくあんまし靈力ないんだしなんとか靈力の消費を抑えたい。

「安心して負けて來い。」

つていう暖かいクラスメイト一同の言葉を背に俺は闘技台へ向かつた。

「始め！！！」

つーかなんであいつはあんなに震えてるんだよ？？

「よ、よろしく。」

「あ、あの……わ、わた、私……戦いとか……あんまし……と、得

意じやなくて。」「

「で？？」「

「ひつ！……怒らないで怒らないで。」「

なんかすつげー罪悪感感じるんだけど。」「

「俺と戦つて勝つたらまた戦わないダメだぜ？？？」

「う、うん……だ、だから……」「

「だから？？」「

「ふ、不戦勝で……いいで、す。」「

「…………。」「

俺は審判の方を向く。

「えつ…………じゃ、じゃあ漣亮の勝ち！……」「

なんか知らね~けど勝つちゃつたよ。

実はかなりいいクジ運だつただろ。

やっぱ日頃の行いいいんだな。

ちなみに大会記録の早さで俺は勝つたらしい。  
席に帰つたらみんなから滅茶苦茶文句言われたけど勝ちは勝ちだ。

勝てば官軍…………。

ちなみに次の試合で戦うはずだった奴が前の試合で負った傷で辞退したので3回戦も俺は不戦勝だった。

どうかこれからも神の御加護がありますように。

拓也と順を含め内のクラスでは39人中9人が3回戦を突破した。運も実力の内だな。

優華と朋美も突破したらしい。

俺の次の対戦相手は好田傑つて言う奴だった。

靈力は72……しかも頭がいいらしい。

客観的に見て俺の勝率は5%未満。

その5%に賭けるしかないのか…。

「おつかれ〜。」

今まさに勝つて来た拓也をみんなで迎えるちなみに9人中4人はすでに負けている。

「やっぱ4回戦からは伊達じゃね〜や。」

つて事らしい。

「もうすぐ亮の番じゃね〜の??」

「ほんとだ、もうすぐ亮の最後の試合じやん。」

あながち最後じゃないとも言えないでのスルーした。

「じゃあ行つてくるわあ。」

「頑張つて〜。あんまり頑張るなよ。」

「うせなら靈力90とか言つ奴でて来いよな。

「両者前へ！……」

好田傑は確かに強そうな雰囲気を出していた。

靈力は拓也や順に劣るはずなんだけどあいつらより強いんじゃね～かな？？

「では、始め！！！」

「よろしくお願ひします。」

礼儀正しく挨拶して来た。

「よろしく…お願ひします。」

こういう真面目なタイプは苦手なんだよなあ。ハツタリが効かなさそうだ。

持つてる武器は槍……拓也と一緒にか……。

好田は一気に差を縮めて突きを繰り出した。

「ツツ！！！」

間一髪でかわしたが今度は蹴りが襲いかかる。

「あつぶつね～。」

なんとか体勢を持ち直した時に好田が話掛ける。

「やはり体術はかなりできるようですね。」

試してやがったのかよ。

「次は剣技を見せてもらいます。」

と防御体勢をとる好田に俺は斬りかかった。

1合2合と打ち込んで行く。

6合目でやっと退きやがった。

こいつ…槍術もかなりのもんだな…。

「やはり…剣技は大したものですね。靈力がなくて助かりました。」

確かに靈力を使われるとマズくなるな。その前に何とかしなくちゃなんね～な。

「では…足元を掬われる前に終わらせてしまいましょう。」

靈力2-1の人間にそれはやめてほしいぜ…。

俺は手を構えて集中して好田に差を積め斬りかかった。

バチイツ！！！

「痛え～！！！何か電気走った！！！」

刀が好田に届く前に何かに弾き飛ばされた。

「あれが靈力壁って奴かよ…やつかいだな。」

好田が靈力使って攻撃してたら俺はおしまいだ。

何としてもあいつが攻撃の準備する前に試合を終わらせね～と。

「もう遅いですよ。」

地面に突き刺して槍を手にとって好田は言った。

その瞬間に俺は地面を蹴った。

「遅いって言つてるでしょうが。」

そう言つて好田は槍を突き出した。

反射的に刀でガードする。

その瞬間にぶつ飛ばされた。

ガラガラと音を立てて闘技台の周りに設置された壁の一部が俺の周りに落ちる。

頭を打つのは避けたらしげが背中を直撃したらしげ。

その上、手まで痺れてやがる。

「これでわかったでしょ。靈力無しじゃ僕には勝てませんよ。」

全く持つてその通りだ。

でも、どうせなら最後に少し悪あがきしてもいいだろ。俺が出せる限りのスピードを出して差を詰める。

「なつ…！」

ギリギリで槍を構えるがその時に俺はすでに好田の後ろに周つてい

た。

「いくら強力な靈力でも当たんなきゃ意味ないんだよ。」  
まだ反応しきれたない好田を俺は斬りつけた。

「そんな……靈力壁で防衛したはずなのに……。」

靈力壁？？

今度はそんな感じ全くなかつたんだけどな。

「くつそおお……！」

ヤケクソかよ……。

とにかく無茶苦茶に突きを出してきた。  
ダメだ……血を出しすぎて避けられない。

また反射できに刀が出た。

このままじゃまたぶつ飛ばされるんだよな……。

正直言つて諦めかけたけど現実は……俺がなんとか槍を止めてるらしい。

「な、なぜ靈力を持つてないのに……。」

そう言って好田は倒れた。

なんとか……勝つたみたいだな……。  
周りの音が聞こえない……。

なんか目の前が暗くなつて來た……。

もちろんこの後どうなつたかなんて俺は知らない。  
気が付けば医務室のベットに寝かされているところだった。

俺は第4戦には勝つたもののドクターストップで第5戦には出れなかつた。

総合序列32位ルシ

正直言つて靈力が少しもあがなり。元強つたがる三

トモハ、おまえがうるさいんだ。

ちなみに俺の状態はけっこう悪い方らしい。

壁にぶつかつた勢いで内臓が傷付い

そりやあ血がいこはし出で詰た

療養に追いやられてたな。

氣になると言えばそれくらいか……。

「やつほー！元気かい？？」

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

o

目の保養にはなるけど今は静かな方がいいんだけどな。

「あ、この子は寒川綾つて言うの。私の友達。」

そりゃあは優華の後Nに立っていな女子生徒かしN

「秋の」

「で、容態はどうなの？？靈力21のくせに序列32位の亮くんは。

1

「リニア音楽」

「脱力出すなよ。」

と言いながら優華はりんごを剥きだした。

「そう言えば優華は序列何位だったんだよ？？」

「綾は30位だったんだよね～。」

「はい。結構頑張りましたあ。」

「…………。」

「私は25位、朋美は26位。」

「へえ～。すげ～じやん。」

つて言うか俺の32位ってあんまりすげ～じやね～よな。

「あと亮の事で学園中噂があるんだけど密態に障るといけないから言つちやダメだって言われたから言わない。」

じゃあ言うなよとかいつのまに亮つて読みふうになつたんだよとか

突つ込み禁止。

「「」のりんごおいしいね。」

自分で食べるのかよ。

食べながらチラチラこいつ見るなよ……。

「はい。1つぐらいあげるわよ。あ～ん

なんか乗りで食べさせてもらひつた。」

「優華あ。もう授業が始まりますよ。」

「あ、ほんとだ。じゃあもう行へね。」

「ああ。楽しかったよ。」

「じゃあまたりんご食べに来るから。ばいばい。」

もつとましな理由で来いよ。

つか周りからの嫉妬の視線が痛い。

余計早く退院したくなつて來た。

## 第15話・新靈力種

いざ退院してみると結構ややこしい事になっていた。

どうやら俺が靈力使って戦つてたらしい。

好田の反応が間に合わないくらい速く動けたのも、靈力壁や靈力での攻撃が効かなかつたのもそのせいらしい。

つて事は靈力使つたの最後のちょっとだけだろ??

あんま使えてね~じやん……。

「だから、問題は亮が靈力使えたとかそこじゃなくて靈力の種類なんだよ。」

「靈力に種類なんてあるのか??」

初步的な質問ですみませんねえ。

これも読者の為……じゃなくて何もわかつてない俺の為なんで。

「だから、靈力にはいくつか種類があつて、大きく分けて3つあるんだよ。」

遠距離型と治癒型と対物型らしかつた。

まだまだ拓也の半分キレた状態の説明が続く。

「遠距離型は遠距離攻撃、治癒型は治癒力、対物型は武器に靈力宿して戦うんだよ。」

ちなみに靈力壁はどれでも作れるらしかつた。

「だから何だよ??どこが問題なんだ??」

「はあ~。」

クラス一同の溜め息でいざいます。

「お前は靈力を体の表面と武器の表面に圧縮して使つたんだよ。」

「なるほど。それであんなスピードやらが出る訳か。」

「そんな能力は世界中で発見されてないんだ。」

。。

束の間の沈黙。

「じゃあ…俺は世界初の人間なのか??」

「やつとわかったのかよ。」

すかさず順の突つ込みが入る。

「つっすっげ～！！！」

「は？？」

「世界初だろ？？すっげ～じゃん！！！いや～流石俺？？」

「…………。」

まだ俺は状況を理解できない？？

拓也君お願い！！！

「世界初って事は、前例がないんだ。」

「それくらいわかるって。」

「つて事はどうやつて訓練すればいいのかもわからんね～し、どう応用するかもわからんね～んだよ。」

「…………。」

黙つて聞いてマス。

「強くなる為には並大抵の訓練じゃダメつて事なんだよ。しかも効果的な訓練方法が見付かるまでは訓練量に比例して強くなれる訳じやないんだ。」

なるほど、やつと状況が理解できた。

でも俺にとっちゃ大した事じやないんだけどな。

「だからなんだよ？？人の倍しても普通の奴に追いかけて事だろ？？」

「ああその通りだ。」

「じゃあ俺は人の10倍訓練してやんよ。」

たつた100年の人生…………どうせなら誰よりも強くなつて死んでやるよ。

人の10倍訓練してやるって言つてみたけど実際はまず基礎がなだつた。

井伊の話によると

「お前は靈力を戦いの中でどう使うか天性的にわかつてゐるんだから靈力があれば今の倍以上強くなるはずだ。」

らしかつた。

マジかよ……。

強くなるのって簡単だなあ。

「そつからが難しそぎんだよ。」

ちなみにこれは順の言葉。

夏休みに入るまで普通の授業に出つた井伊と1対1の補習だつた。正直かなり辛かつた。

何回か1年と一緒に授業受けたからなあ。

そのおかげで1学期が終わる頃には靈力が55まで上がつていて、ちなみに全国平均が50だそうだ。

でもいくら靈力が上がつたからつて強くなる訳じゃなかつた。

靈力が上がつた分コントロールが難しい。

俺の能力はコントロールができないと体の内部から靈力分のダメージがくる（実証済み）

「どうしたもんかねえ。」

「大変だなあ。」

「ああ。」

気温が高く暑いせいか教室の空氣と共に会話もだれてくる。

「そう言えばさ。」

今までほとんど機能停止していた順が何か思い出したみたいだ。

「井伊が亮読んで来いつてさ。」

「そつかあ。」

「いつ言われたんだよ？？」

なぜか拓也が聞いた。

「30分くらい前だつたかなあ。」

。 。 。

俺も機能停止したい。 。 。

そう思つた時放送が流れた。

『漣亮、漣亮、今すぐ職員室まで来なさい。』

お決まりのタイミング。

職員室はかなり涼かつた。

「夏休みなんだが、講習があるのは知つてるよな？？」

「明日からつすよね。」

「お前は出なくていい。」

「……マジで？？」

「ああ。その代わり俺と補習だ。」

。 。 。

講習に出たいです。

「期間は講習と一緒にするな。」

でも井伊と1対1はもう飽きました。

でも言つても無駄だらうなあ。

「駄目だ。」

言つてみたけど無駄だつた。

明日から夏休みだけどあんまり嬉しくない。

夏風邪でも引こうかな。 。 。

## 第17話・夏休み

『待ちに待つた夏休み！――』つてのがよかつたんだけど、そうはなってくれないらしい。

毎日毎日、朝から晩まで補習だった。

講習は昼とかで終わってるだろ……。

そんな悪魔の補習も明日で終わる。

徐々にテンションが上がつてくる。

人の10倍つて事は夏休みに遊んでる暇なんかないはずだけど、まあそこは我が親愛なるクラスメイト諸君の寛大な心を期待しよう。「これでなんとか今のクラスで授業を普通に受けれるだろ。」5時になつてやつと井伊が言つた。

「マジで！？ よかつたよかつた。」

「それにしても、2ヶ月でここまでできるとはな。」

「ん~。やっぱ天才だよな。」

とは言つてみたものの実は家でもかなり訓練したからな。  
俺つてば結構努力屋さん？？

ちなみに今更だけど、俺達が住んでる国の説明をしておこう。  
名前は、……何だつたつけな？？

30年前に戦争で負けてデイルファリアって言つた国に負けて、今  
じゃデイルファリアの保護を受けてるし、世界でも数少ない平和な  
国だ。

つまり夏休みになれば海水浴とかいろいろできる訳だ。

つて事で、前々から拓也に誘われてた可愛い女の子と海水浴つて奴  
が明日決行される訳であります。  
何かこじつけっぽくてすみませんねえ。

俺に文句は言わないで下さい。

ちなみに行くメンバーは俺と拓也と順、女子は優華に朋美に綾らし  
い。

可愛い女の子の水着姿が見れるのでお楽しみに（頑張って想像して下さい）

海水浴当日、かなり晴天、日焼けに注意下さって感じかな？？  
海水浴場までは朋美の親が送ってくれるらしい。

「朋美ちゃんの家つて何してんの？？」

迎えに来たりムジンを見て拓也に聞いてみた。

「確か……国認の武器製造会社の重役だつたかな？？」

「知らなかつた……。」

順も同じらしい。

お前は知つとけよ。

「それにしてラズボリスでよかつたねえ。夏休みに海水浴できる  
なんて」

「そうそう、この国の名前はラズボリスだつた。

「去年は3人で行つたよね？？」

「はい。楽しかつたですう。」

どつちかつて言うと朋美より綾のがお嬢様だろ。

「亮は泳げるの？？」

「何でもできないみたく言つた。靈力に関係なかつたら何でもして  
やるよ。」

ちょっとムキになつた。

「じゃあ、かき氷買つてね？？靈力に関係ないよ。

「…………。」

優華と喋つてるとビ「うしても調子が狂う。

## 第18話・海水浴

ちなみに俺達が着いたビーチは世界でも1、2を争う所らしい。  
まあ海水浴なんかできる所が少ないんだけど。  
でも、まあかなり綺麗だった。

「お前、もう補習行かなくて大丈夫なのか??」  
「なんとか普通の授業受けれるつてよ。」

ちなみに女子3人と順は遊びに行つた。

「本当は序列何位ぐらいなんだろうな??」

「32位だ。」

「かなり運がよかつただけだろ??」

まあその通りと言えばその通りなんだけどな。

今じゃ32位より上な自信はある。

「疲れたあ。」

とビーチバレーをしていた4人が帰ってきた。

「ねえ。亮。」

「何だよ??」

「かき氷食べたい」

「.....。後で払つてやるよ。」

何氣なく言つてみたんだが優華は怒りだした。

「女の子1人で行かせる気なのかあ!!?」

「.....一緒にきて欲しいのか???」

皮肉だつたんだけどな.....。

「うん」

そんな嬉しそうな顔されちゃ断れね~よ。

つて事で2人で浜辺を歩き出した。

ちなみに優華の水着はシンプルなビキニ。  
白だった。

「何見てるのよ!!?」

「いや、別に見てね、じゃん。」

「うわあ。えろつちいなあ。」

……男なら誰でもお前の水着姿見たら同じ事想像するだろ。

「亮つてさ、西院に来る前は学校行ってなかつたんでしょ？？」

「ああ。」

「何してたの？？」

それはちょっと触れて欲しくないなあ。  
多少知られたらマズいかもしらねえ。

「ちょっと……ね。」

「言えない過去つてやつ？？」

「そうそう。謎の転校生だる。」

「何よ気取つちやつて。」

そんなんすぐにするなよ。

なんか気まずいだろ。

「じゃあさ、何してたか知れないけど、彼女とかいたの？？」

「何を聞いて来るんだよ、このジョーシコウセイは。

「そりあ、それなりにいたけど？？」

「遊んでたんだ。」

「何でそななるんだよ？？」

「つーか何でテンショントン下がつてるんだよ？？」

「優華はどうなんだよ？？」

「私はあ、今も今までずっと付き合つた事ありません。」

「嘘だろ。お前で付き合えなかつたら誰も…。」

「好きな人がいなかつたんだもん。私はすつこく好きになつた人と  
しか付き合わないので。」

「べへ」

と舌を出して俺の前を歩き出す。

女の子つてのはつくづく謎だよな。

ちなみに何故か朋美と綾の分も買わされて俺達は戻つた。

それからは優華もいつも通りのテンションで過ごしていた。

何だったんだろう……さっきの会話は。

それからあのメンバーでいろいろ遊びに行つた。  
遊園地も行つたし映画も行つたし…。

ここで宿題をしてないつてのに気が付くのがお決まりだけど、俺は補習で宿題もやらされていたのでそういう事はなかつた。  
ちなみに順は全くやつてなかつたらしく、最後の5日で綾に手伝つてもらひながら、なんとか終わらせたらしく。

俺も

「手伝つてあげよっか??  
つて優華に言われたけど……。

始業式は遅刻した……。

どうやら学期の始めとかなんかは遅刻する習性があるらしい。

「また遅刻かよ。」

つてみんなに言われたけどそれじゃいつも遅刻してゐみたいじゃね  
ーか。

「そう言えば2学期に修学旅行あるんじゃねーの??

「ああ……あるなあ。」

???

修学旅行つて普通楽しいもんじゃねーの??

なんで嫌がつてんだよ??

「ウチの修学旅行は強化合宿みたいなもんなんだよ。」

「強化合宿??」「行くんだよ??」

なんか無茶苦茶だな、西院学園。

「それぞれ違うんだよ。何人かのグループに分かれて、行き場所は  
クジ。」

「へえ。いい場所に当たるといいな。」

「ちなみに場所は全部、危険度Bだ。」

危険度B地区……戦う技術を持つていなければ確実に死ぬ地区、かなり重度の警戒が必要……

だつたはず。

……修学旅行つて言つより……マジで強化合宿ですね……。

「去年はたしか、3人死んだよな??」

「そうだつたな。かなり多数の重症者もいたつて話だしな。」

そんな事続けて苦情来ないのかよ。

「だから2年は修学旅行までサバイバル技術の授業ばっからしいぜ??」

「サバイバル技術のテスト合格しなかつたら修学旅行行けないらしい。」

「ラツキーじゃね〜かよ。」

率直にそう思った。

「修学旅行行けなかつたら単位をくれないんだよ。」

ちなみに西院は留年なんて制度とつていい。

単位を認定されなかつたら、即、退学らしい。

修学旅行まであと1ヶ月ちょっと。

その間のサバイバル技術の授業は俺にとつては……どうだらうな。

## 第20話・特別授業1

次の日から早速サバイバル技術の授業が始まった。  
特別授業講師つてのが来て教えるらしい。

今日の時間割りは、1時間目特別授業、2時間目特別授業、3時間  
目特別授業、……（以下略）つて事ですと特別授業だった。

「このクラスの特別授業を担当する中羽だ。」

これが俺達の特別講師の名前。

ちなみに授業は楽しく、おもしろく、がモットーらしい。

「では、1問目です。あなたは今、無人島に漂流しました。始めに  
何をしますか？？」

こんな授業。

確かに楽しく学べるけど多少不安になるだろ。

「では、今日習つた事を復習する為にテストをします。制限時間は  
10分。始め！！！」

ちなみに俺は満点だった。

「どう言つ事だよ？？」

中羽が俺を褒めまくつて帰つて帰つて行つた後で順に言われた。

「サバイバル技術は……得意分野なんだよな。」

「みんな初めて受けるんだぜ？？得意もあるあるかよ。」

拓也の突つ込みつてかなり痛い所突いてくるよなあ。

「いや……だから……西院来る前にちょっとサバイバルの経験あつ  
たんだよ。」

このまま行けば次に誰かが言つ言葉は……。

「だから、西院来る前つて何してたんだよ？？」

……これ。

「き、企業秘密。」

苦しいな……。

「過去を匂わす男つて格好いいじゃん！……！」

我ながら、言い訳にしか聞こえない。

「どうせ、何でもないんだろ？？」

「靈力なかつたもんなあ。」

不本意に言われよつだけど、それでいいつス。

それから毎日テストで満点とつてやつた。  
ざまあみるつて感じ…………だつたんだけビ、みんなも〇〇代ばつ  
かとれるよつになつて來たからなあ。

明日からは、實際に行動してみるひし。

この学園には、雪積もらせたりジヤングルになつてゐる部屋があるひ  
し。

よけい訳わかんねえ学校じやんかよ。

「亮つて特別授業すつ」こができるんでしょ？？

「また例の情報網か？？」

「うん なんでつて聞いちゃダメつて事も知つてゐ。」

それはよかつた。

一安心。

「私、あんまり得意じやないなあ。」

「なんでだよ？？」

「女の子だし？？サバイバルつてのは向いてないの。」

「どうせそんな事だつと思つたよ。」

睨まれた、……可愛い…………〔冗談だろ、引くなよ。  
ちなみにこれは優華との食堂での会話。

今日はたまたま一緒になつた。

周りはいつも一緒に食べてるつて言つただけどな……。

昨日はお前達と食べたらつて言つたの。」

## 第21話・特別授業2

今日は実践練習の日だ。

午前中は雪ね中での寝床の確保の仕方をするらしい。  
雪の中じゃあ普通に寝ると凍死してしまつ可能性があるから、寝床の確保が重要になってくる。

まず縦に穴を掘つて、その穴の中から横に穴を掘り、小さな洞窟みたいな空間を作ると言う寝床の確保が1番メジャーだな。  
無理なら無理で、蒲倉でも作ればいい。

まだ9月なのにみんなで厚手のコートやら何やらを着て積雪室に集まつた。

「つて言つかサブつ！……」

騒いでる順に雪玉を投げた。

それから30分間、中羽も含めクラス全員で雪合戦をした。  
拓也が止めてなればもつと続いていたはずだ。

「では、今から1時間で各自寝床を確保しろ。」

自分も遊んでた後でよく言えるぜ。

1時間後、積雪室にいろんな建造物が出来た。  
みんな掘る事はしなかつたみたいだ。

「では、みんな漣の所に集まろう。」

俺以外の生徒を全部見て周つてから中羽は言った。

「漣が作った様に穴を掘るのが1番簡単で1番暖かい寝床を確保できるやり方だ。」

「でもさ、先生。雪なだれとか起きたら埋まっちゃひぜ？？」

順は何とか俺失敗してる様に持つて行きたいらしい。

……昨日さんざん馬鹿にしたからな。

「それはみんなが作った蒲倉だつて一緒だ。1番大切なのは安全な場所を探す事だ。」

ちなみにこの後は自由時間。

しつかり授業しろって。

「亮、もう妬んだりしね～から教えてくれよ。」

やつと順が折れた。

「わかったよ。始めてからそつまうとね。」

「つるせえ。」

つて事で順にいろいろ教えた。

午後からは密林地帯での寝床の確保だった。

まあ言つまでもなく大丈夫だった。

1週間ずっと実践練習ひじい。

「意外と簡単だな。」

やつと口ツを掴んだらしい順は「機嫌だ。

「今日は拓也、朋美ちゃんと一緒に帰る口だつたよな??」

「今日は先に帰つといてくれだつてさ。」

「おつ……怪しこぞそれ。」

「残つて練習するらしいわあ。」

「……全く怪しくね～な。」

順の期待は一瞬にして崩れ去つた。

「はつ……！そうかいそうかい。じゃあ俺は女の子を待たせてるから。じゃ～な。」

と言つて順は走り出した。

「女の子を待たせてるつて??

誰だよ……その女の子つて。

明日、尋問だなあ。

## 第22話・抽選会

朝、順が来たら即効拓也と昨日誰と帰ったのか聞いてみると  
「ああ。あれ？？嘘だよ。」  
つて言つたんだけど信用していいものか…。  
まあ信用してやるとしよう。

それから2週間ぐらいたつて修学旅行へのカウントダウンがはじまつた。

修学旅行まであと5日つて言つて今日は説明会があるらしい。  
俺も順も途中で寝てしまつて、後で拓也に説明をしてもらつた（説  
教付き）。

「まず今日中にチームを決めなくちゃいけないんだよ。約6人チー  
ム。男女混合可。」

「なるほど。」

さつき嫌と言つほど拓也に怒られたので2人で黙つて聞いていた。  
「で、俺と朋美は一緒に行こうつて言つてるんだけど。」

「ふんふん。」

「お前達は俺に着いてくるだろ？？」

「うん。」

「で、朋美は雁原と寒川連れてくるから、これで6人チーム完成。」

「かなり単純なチーム構成だな。」

「嫌なら抜けてもいいぜ。」

確かに順の言つ通りかなり単純なチーム構成だな。

お決まりの6人つてか？？

しかも手続きは全部拓也がやってくれるらしい。

「お前達がするより俺がやつた方が確実だ。」

だそうだ。

拓也は頼りになるなあ。

それから2日後に抽選会があった。

今は拓也と朋美が抽選会から帰つてくるのを待つてる。

「どこになつたの？？」

と優華は帰つて来た朋美を見てすかさず聞いた。

「え？」と。サンペルシカ島だつたかな？？

「ド」「だよそれ？？」

「聞いた事ありませんねえ。」

「今から調べるんだよ。」

.....。

「オランダ海の真ん中らへんの無人島だよ。」

5人が一斉にこっちを向く。

「漣くん、しつてるの？？」

「ああ。あんま行きたくないな……。」

「でも、オランダ海だろ？？戦闘地区じやないんじやないか？？

「密林しかない島だぜ？？」

「うつそー！ー！やだつ！ー！」

「何で知つてるんだよ？？また過去の話か？？」

「ああ。行つたことはないけどな。聞いた事はある。」

「とにかくもつと詳しく調べてみる。」

そう言つて拓也は教室を出て行つた。

図書室へでも行つたんだろ？。

「あ、待つてよー！」

朋美が後を追う。

「密林ですか。クジ運悪いですか。」

「拓也達に行かせるべきじゃなかつたよなあ。」

今さら何を言っても仕方ないので俺は何も言わないがそれなりの準備はして行った方がよさそうだ。

拓也がサンペルシカ島の事を図書室で調べたけど、密林だけの島だと言つ事以外の大した事はわからなかつた。

何か対策を練るはずだつたんだけど、順の

「亮がいるからなんとかなるだろ。」

つて言う言葉にみんな納得してしまつた。

確かに何かマズい事があつた気がするんだけど覚えてない。まあ何とかなるだろ。」

で、修学旅行當日になつた。サンペルシカ島までは学校から船で送つてくれるらしい。

航海日数3日…………修学旅行は1週間のはずだから島で4日過ぐる事になる。

「見えたぞ！――！」

と甲板から順の叫ぶ声がするので甲板に上がつた。

「うわー。緑ばっかり。」

「優華ちゃんは軽くショックです。」

「私もです。」

女性陣の反応。

「今になつて不安になつて來た。」

「亮がいるから大丈夫だつて。」

俺を除いた男性陣の反応。

島に近付くにつれて誰もしゃべらなくなつて來た。

「じゃあ4日後にここで待つとけよ。」

そう言い残して船は戻つて行つた。

「今、何時？？」

「8時ぐらい。」

「じゃあ、ロードワークすつか。」

つて事で3時間ぐらい歩きまわつてやつと落ち着けそつな場所に着いた。

「じゃあ、私達飯」飯の準備するから寝れるような所作つといてね。

「出来たら呼べよ??」

とカツブル2人が勝手に決めたので俺達は寝床を確保する事にした。俺達が生活する場所は川の上流あたりにあるちよつとした広場だつた。

「どんな風なん作るんだよ??」

「1人分ずつ作つたら時間足りなくなるからな。全員が寝れるもんにするか。」

「ま、妥当だな。」

上から順、俺、拓也。

「じゃあ順は骨組みになるよつな木、拓也は柔らかい草みたいなん採つてきてくれ。」

「うー。」

俺は、もつげとロードワークでもしてみるかな。

俺達がそれぞれの仕事を終えて、広場に戻つて来てからすぐに綾が呼びに来た。

「ご飯できましたよ。お。」

「あー。やつとかよ。」

「疲れた、疲れた。」

ちなみに本日の飯は、スープとパンだった。

「すつげー簡単な食事だな。」

「文句言わない。」

昼食後はみんなで集めて来た木とかを使って寝床を作った。

「疲れたああ。」

「もう、夜になっちゃいましたあ。」

「あ～腹減つたあ。」

「お前はあんまり動いてなかつただろうが。」

「つむせえ。亮と違つてなれてないんだよ。」

「1日目の晩ご飯は持つて来たものでまかなつた。」

明日からは自分達で探さなくちゃいけないけどな。

修学旅行2日目の朝は、昨日の残りでなんとか食べた。

「昼からは何するんだよ？？」

「食料調達しないといけないからな。」

「食料調達って何を探りにどこに行くの？？」

30分ぐらいの協議で女子は肉は嫌だと言う意見が一致していた。

「いろいろ汚そう。」

が理由らしい。

さりに30分ぐらい協議して、3つのグループに分かれる事になった。

拓也、朋美チームは待機と寝床の見張り。

順、綾チームは海に出て魚を探つてくる。

そして、俺と優華は森の中歩きまわって食べれる植物を探つてくるらしい。

昼ご飯は余った米で作ったおにぎり。

暗くなる前に帰つてくることが決定事項だった。

「私も待機がよかつたあ。」

「文句言つなよ。ジャンケン負けた優華が悪いだろ。」

「つて言つかこんなの食べれるの？？」

籠に入つている植物を取つて優華が言う。

「それは食べるんじやなくて、傷薬みたいなんになるんだよ。」

「ふうん。ますます過去が知りたくなつて来た。」

絶対教えません。

そろそろ諦めるよ。

「でも亮は昔、遊んでたんだよねえ。」

「遊んでないって。」

「彼女いたつて言つたじゃん。」

「それのどじが遊んでるんだよ？？」

「不純異性交友だ。」

「何を考へてるんだろうな……この馬鹿は。」

「じゃあ、拓也と朋美ちゃんは不純異性交友だ。」

「あれは、恋愛です。」

「どう違うって言うんだよ。」

「亮はほんとにその彼女の事好きだつたの？？」

「……好きだつたから付き合つてたんだる。」

「今は？？」

「……今は別に。」

「何よ？？その間。」

「なんでこの前から2人になるとこんな話になるかな？？」

「そう言えば何でお前は好きな人ができないんだよ？？」

「ん~。理想が高いのかな？？」

「どんなのが理想なんだよ？？」

「安心して私の事を預けられる人かな。」

「それだけ？？」

「そお。それ以外は格好よくなくとも、別に優しくなくともいい……くはないかもしけないけど。」

「なんだよそれ。」

「とにかく好きな人ができなかつたんですけど……」

「やつぱり女の子はよくわからない。」

「何を考へてるんだか全く予想もつかねえよ。」

「はい。もあこの話終わり……なんか氣まずいじゃんか……」

「自分から始めたんだる。」

「つてかそろそろ帰らないと暗くなっちゃうな。」

「ほんと！？じゃあ早く帰ないと。」

「そう言つて優華は先に歩き出す。」

「おこ、優華！……」

「はい？？」

「帰り道分かるのか？？」

「…………。」

順と綾はきちんと自分達の仕事をしたらしく。かなり魚があつた。

「今日食べる分だけでよかつたのよ？？」

料理した朋美が言つ。

「なんでだよ？？」

「こんなもん1日たつたら腐るわ。」

「あ…………。」

「だから言つたんですよ。」

綾もいろいろ苦労したっぽいな。

「私、明日は待機がいい！！！」

「私もですう。」

「じゃあ、俺達は明日、山菜採りにするか？？」

「うん。やつする。」

その後どうちが休むかで一悶着あつた。

昨日、優華と綾は1時間ぐらい話し合いで決めよつと思つたらしく話していたのだけど、じつやら最終的にはジャンケンで決めたらしい。

どうなんだよ。

で、結局俺達は待機する事になった。

暇そりだから嫌だつたんだけどな……。

「意外と暇だねえ。」

自分で待機を勝ち取つたくせにこんなことまで言いやがつた。

「我慢しきつて。昨日歩き疲れたんだろ??」

「ふ~。」

だから可愛いつて……なんつって。

それから1時間ぐらいたつていきなり草むらから気配がした。

「……ねえ……。このジャングルつて獸とかいるの??」

優華のこの言葉で思い出したんだけど、昔、知り合いかからどつかの政府が靈力を持つた獸……靈獸を作つて実験としてある島に放した

つて話を聞いたことが……あつたような、なかつたような……。

「でも、ロードワーク中、獸どころかウサギとかもいなかつたもんね。大丈夫大丈夫。」

優華は自分で自分を納得させたいらしい。

「ウサギもいなかつたからこそ何かいるかもしれないな。」

その気配は動かないが、ずいぶん殺氣を持つてる。

「優華……武器。」

優華は立掛けてあつた自分の細身の剣と俺の刀をとる。

俺が刀を持つのを見計らつていたように獸は草むらを飛び出した。

「うつわ～。優華ちゃんは少し怖いです。」「

もつちよつと女の子らしい怖がり方してほしいです。

大きさはライオンを一回り大きくしたぐらい、体の格所に青い先が入っている。

「あいつ…靈力持つてるから氣をつけろよ。」

「靈力持つてるの…？」

「たぶんな…。」

そんな会話をしてる暇はなかつたようだ。  
いきなり飛びかかってきた。

一回の跳躍で一気に俺達のところまで飛んで来る。

「うわっ！…爪伸びた！…！」

まずは優華に遅いかかる。

「牙も長くなるはずだから注意しとけよ………」

さすがにこんな状況だからか、

「何で知ってるの…？」

とは突っ込んで来ない。

後ろから攻撃しようとするとして、ぽがムチの様に襲つてくる。

「後ろにも目が付いてんのかよ！…？」

つてぐらい正確に足下を狙つてくる。

次の瞬間、優華が細長く針の様な靈力弾を発射した。

当たる面積が小さい分少量で威力も高い。

近距離だつたので獣は避けようがなく、後ろに後退した。

「やつと俺の特訓の成果を読者諸君に見せれるぜ。」

「特訓…、補習じやなかつたつけ…？」

……。

優華とほのぼの喋つてると、獣が口から靈力弾を出した。

優華が前に出て靈力壁を作る。

「靈力戦は任せた…！」

俺はそう言って靈力を足に圧縮して地面を蹴つた。

次の瞬間には、俺の攻撃範囲まで近付く。

フェイントを入れて刀を振り下ろす。

その瞬間に後ろに吹っ飛ばされた。

「痛つて！。靈力壁の事忘れてた。」

「もう1回補習受けなきやね。」

優華は言いながら靈力の玉を作り出す。

「援護お願い！！！」

言われた次の瞬間には俺は獸の近くにいる。

次は靈力壁に吹っ飛ばされないように刀にも靈力を圧縮する。

ものに圧縮した靈力は本来の靈力とは全く違う性質になる。

そのため、靈力壁などの並大抵の靈力では全く太刀打ちできない（らしい）。

今回もその例外ではなかつた。

さつきと同じ形で刀を振り下ろす。

獸は叫び声を上げて後退しる。

「亮！……どいてっ！！！」

と言つ声が後ろから聞こえたので俺はその場を離れる。

その直後に1メートルぐらいの大きさになつた靈力の玉が獸に向かう。

首筋を傷付けられて、大量に血を流している獸はふらふらしながらも避けようとしている。

優華は少し靈力の軌道を変えた。

獸はそれと反対に逃げようとする。

そこに優華が小さな靈力弾を撃つ。

それを避けた獸は自分から靈力の玉に突つ込んだ。

それから獸は動かなかつた。

## 第26話・修学旅行4

獣の叫び声や靈力に反応して拓也達4人が戻つて来たときにはもう全て片付けた後だった。

「な、何だコイツ？？」

「靈獸だよ。かなり強かつたんだから。」

「靈力持つてるのか？？」

「どつかの国の研究段階の生物兵器だ。」

順や拓也の疑問に俺と優華が答える。

「どうしてかわからないけど、かなり弱つてた。」

「他にもこんなのがいるのかなあ？？」

「うう。嫌ですぅ。」

「他にはいなはづだ。」

「何で？？」

「たぶん、生き残りなんだよ。」

「前は他にもいたって事か？？」

「ああ。何匹かこの島に放してどれが1番強いか試したんだろ。」

「俺は昔に聞いた話を完璧に思い出していた。」

あの時は、こんなのと関わるとは思つてはいなかつたけど。

「普通こう言うトラブルは最終日に起きるもんなんだけどなあ。」

俺はこう言つたが次の日…つまり修学旅行最終日は全く何もなかつた。

平和すぎた。

「やつと終わるんだね～。」

「早く帰つてお風呂入りたいなあ。」

「魚はもう食べたくありませんよお。」

女性陣。

「俺も魚は嫌だな。」

「俺はベットで寝たい。」

拓也と順。

「あと1日ぐらい長くてもよかつたなあ。」

全員に睨まれた。

冗談に決まってるだろ。

毎晩、毎晩、隣で寝てる優華の寝息が気になつて寝不足なんだよ。

……これも冗談。

「あれ？？まだ船来てないな。」

海岸に付いた俺達だつたけど船はまだ来てなかつた。

「おかしいな。もう来てる頃だと思つたんだけど。」

「ここであつてるんですかあ？？」

「あつてるわよ。」

こつちは早く帰りたくてウズウズしてゐるの。

「ねえ、亮？？」

「ん？？」

「あれ、船じやない？？」

優華が指を示した方を見ると確に船があつた。

「やつとかよ。」

「おそいですう。」

「行きの船とは違うな。」

なんか、不吉な予感がする。

「拓也、双眼鏡持つてただろ？？」

「ああ。どうかしたのか？？」

「あの船が掲げてる旗を見てくれ。」

拓也は首をかしげながらも双眼鏡を取り出す。

優華は何か言おうとしたが言わなかつた。

たぶん俺が真剣な顔をしていたからだろう。

「こつちに向かつて来てるから大丈夫だつて。」

と順は言つたが……。

「バラが3つ付いた盾が書いてあるぞ。

拓也が双眼鏡を覗きながら言つ。

バラが3つ……盾……。

「古代3国同盟だ！－！」

「は？？」

俺以外の5人は意味が分かつてない。

「デイルファリアが負けたのか？？」

## 第26話・修学旅行4（後書き）

この度は『黒き征裁』を読んで下さり誠にありがとうございます。

第26話を持ちまして第一部が完結いたしました。

第一部が完結いたしましたので記念に番外編を短編で書いつゝ思つてています。

読者のみなさまにもより楽しんでいただくために、番外編のテーマを募集したいと思います。

もしよければ評価の所にリクエストして下せ。』

読者のみなさまの意見を参考にさせていただきます。

どうぞ気軽にリクエストして下さい。

最後になりましたが、これからも『黒き征裁』を続けていくつもりですでので、今後ともご支持の方をよろしくお願いします。

## 第27話・現状把握

古代3国同盟って言つのは、イギリス、フランス、スペインの同盟の事だ。

かなり昔から繁栄してゐるらしい。

まさか同盟しているとは思わなかつた。

3国共、デイルファリアに敵対していたはずだ。  
その船がオランダ海……つまりデイルファリア領海に入つてくるつて事はデイルファリアが負けた事になる。

負けたと仮定すると、何故負けそうだと言つ情報が入つて来なかつたことは、デイルファリアが情報操作をしていた……で納得できるが、何故、今、サンペルシカ島に現れたのかが説明つかない。

船が岸に着くと軍服姿の男が4人降りて来た。

イギリス語、フランス語、スペイン語でそれぞれ話だす。

「は？？何言つてるんだよ？？」

「順くん！！！ダメですう！！！」

いつのまに順くんつて読んでるんだよ？？  
……じゃなくて……。

「何語だよ？？」

と言う拓也の腕を朋美が掴む。

「何も言つちやダメだからね。」

俺が何か言う前に優華が俺の腕にしがみつきながら言つ。

その間にも3人で順番ずつにそれぞれの言葉で喋り続けている。  
すると、後ろに立つていた男が3カ国語で喋り出す。  
男が喋り終えると3人はいきなり俺達を掴んだ。

「ちょ！！何するんだよ！？」

「離せつて！！！」

「静かにしとけ！！！順！！！絶対攻撃するな！！！」

俺の叫び声に拓也や順どころかその場にいる全員の動きが止まった。

「いいから……今は従え。」

優華が俺の腕を掴みながらこいつを見ている。

今は何も説明してる暇じゃない。

船の上に上ると他の西院の生徒もたくさんいた。

そして、その全員が檻みたいな立方体の所に入れられている。

「えつ？？？どういう…………」

優華の口を俺は塞ぐ。

それからイギリス、フランス、スペイン語で言った。

「まず、俺以外の5人をあそこに入れろ。」

3人の男は後ろの男を見てから俺の言った通りにした。

「優華……大丈夫だから今は従え。」

優華が何か言おうとした様なので先に言った。

優華は口を開いたが何とか黙つて従つた。

さつき3ヵ国語で喋つていたのは、

「デイルファリアが負けた。デイルファリア国民は直にデイルファリア本土に戻れ。」

と言う内容だった。

きつと西院の生徒や本土にいないデイルファリア人を本土に返すために派遣されたんだろう。

「で、今から俺達を本土に帰すんだろうな？？」

「そうだ。」

「全員の安全は保証できるんだな？？」

「この船に不備はない。」

「そんな事聞いてるんじゃない。」

「…………保証しよう。」

こんな感じの会話が続いた。

結局は俺も檻の中に入つた。

その中で全員に今の状況を説明し、命の危険はないと落ち着かせた。

命に危険がないとわかつて皆安心したのかどんどん眠つていった。

拓也と朋美は寄り添つて寝ている。

順と綾は反対を向いてはいるもののたぶん手を繋いでいるだらう。

いつの間にそんな関係になつたんだよ。

「亮……？？」

と優華が話かけてくる。

「まだ起きてたのか？？疲れてるだろ？？」

「亮もじやない。ずっと起きてるつもりでしょ。」

「…………。」

さすがにこの状況で全員寝るのはマズい。

「サンペルシカ島でだつてあんまり寝てなかつたでしょ？？」

何で知ってるんだろうな？？

きちんと力モフラー ジュしてたはずだけビ。

「靈獸いるの知つてたからだよね…………。」

「…………。」

「亮はいっつもそつだよね…………。何でかは知らないけど何でも1人で解決しようとする。」

優華の俺の腕を掴む力が強くなる。

「少しごらい頼つてよ…………私じゃ役に立たないかも知れないけど。」

「そんな事ね～よ。俺より強えじやんか。」

「亮の方が強いよ…………。」

こんな優華を見るのは初めてだ。

今にも泣きそうな顔をしている。

「役に立たないかも知れないけど、癒すぐらいだつたら私にもできるでしょ？？」

「…………。」

「私の前じや無理しないで。」

「…………優華…………。」

「そうだぜ。無理しそうだ。」

「俺らの事も少しほ頼れよ。」

「癒すのは優華しかできないかも知れないけど、他の仕事は私でも

できるんじゃない？？

「私だつて、漣くんの役に立てますう。」

「拓也……順……朋美ちゃん……綾ちゃん……。」

「1人で荷物しょいすぎなんだよ。」

「サンペルシカ島でゆつくり寝かしてもらつた分、今度はお前が寝ろよ。」

「優華もですう。」

「漣くんを氣遣つてあんまし寝てないでしょ。」

「つたく……狸寝入りか？？」

「優華……癒してくれるんだろう？？」

優華が笑顔をこっちに向ける。

「うんっ」

「じゃあ寝るぞ。」

他の事は4人に任すとでもしよう。

俺と優華は寄り添つて眠りについた。

優華の香りと暖かさを感じながら……。

こりやあ、かなり癒されるな……。

## 第28話・敗戦国の現状

起きるとまだ優華は寝ていた。

昨日の事思い出すとかなり恥ずかしくなつてきた。

「ラブコメになつちやうじやねーか。」

1人言なので気にしない事。

少したつと何人かの男が全員分の朝食を運んで来たついでに俺を呼んだ。

どうやらお偉いさんが話をしたいらしい。

「どうして君は古代大国の3カ国語を喋れるのかね??」  
かなり豪華な部屋に案内されて、少し待つていてるといかにも強そうな男が入つて来て言つた。

「あんただつて喋れるだろ??」

「私はイギリス人だ。喋れなくては困る。」

「.....。」

「それに、その態度.....あまりにも悠然としすぎている。」  
「俺だけが特別みたく言つなよ。言葉がわかればもつと落ち着いて  
られる奴が檻の中に入いるだろうよ。」

なんか面倒臭い事になりそうだ。

言葉がわからんないふりしてたらよかつたかもな。

「これから言う事を君の学校の生徒にきちんと理解させる事ができるかね??」

「話の内容も聞いてないのにそんな約束できるかよ。」

「では、話そう。」

そう前置きを置いて、男は話し始めた。

「デイルファリアは3分割される事になつた。君達が住んでいる場所はイギリスの領地になる。」

「.....。」

「よつて今日よりイギリス法が全てに適応される。」

「ちょっと待てよ。」

俺は話を切った。

「つて事は俺達は徵兵に行かなくちゃなんね～のか？？」

イギリスでは戦う技術を持った人間は老若男女関係なく徵兵に行かなければならぬはずだ。

「……イギリス法まで知つてゐるのか。」

男は多少驚いた様だ。

だからと言つて事の重大さが変わるわけでもない。

「敗戦国として当然か……。」

「……それを聞いても何とも思わないのか？？」

「俺がどうあがいたところで変わらないからな……無駄な労力は避けたい。」

「君は……何者なんだ？？」

「ただの高校生だ。過大評価すると後で痛い目に合つぜ。それよりまずは俺達全員を帰せ。」

「もちろん。準備が必要だしな。」

デイルファリアの正規軍がイギリス軍になるのにその上まだ徵兵するのか……。

噂通り古代3国は無茶苦茶な法律を作つてやがる。それよりこの事実を俺が伝えろつて言つのか？？ふざけやがつて。

勝戦国として通訳ぐらゐ連れて来やがれ。

「伝えてくれるな？？」

「……。」

「お前が言わないと誰も知れないぞ。」

「……。わかつたよ。」

そう言つて俺は部屋を出た。

伝えれば必ず混乱が起きるだろう。

いくら戦闘技術を持つてゐるからつて戦争に行く覚悟ができるいるわけではない。

逃げ出そうと思えば逃げ出せない事もないが……ディルファリア  
がなくなつた今、古代3国に筆頭する力を持つた国があるだろうか。  
俺1人で考えてても何も始まらないので、とにかく皆に伝える事に  
した。

1つも嘘偽りなく……現実をそのまま……。

かなりの混乱があつた、怪我人さえ出た。

予想していた範囲だつたのでなんとか被害を縮小できたと思う。  
今は皆、騒ぎ疲れて……ショックで静かだ。

もちろん何人かは気を強く持つていた。

拓也も順もその中の1人だ。

優華と朋美と綾はかなりショックだつたようで、今は静かに3人で  
固まつて座つている。

これからどうするかを決めるために、きちんと現状を理解した上で  
落ち着いて判断できると思つた奴を集める事にした。

これからどうなるかは全くわからないが、なるようになるだろつ。

## 第29話・ティル・グレゴリー

結局集まつたのは俺達3人を含めて5人だつた。

何かあればこの5人でこの船にいる50人を先導しなければならない。

勿論、逃げ出す事も考えたが結局リスクが大きいわりにメリットがあまりないので却下となつた。

なりゆきにまかせるしかないかな……。

後でわかつたんだが、この船に乗つていてる内のほとんど全員がまず研修生として軍に入るらしい。

その点では安心だけど……。

俺はイギリス側の軍に入るの多多少マズい。

ううしたものかな……。

そろそろ皆に俺の事を言つてもいいか……それとも……。

まあ成り行きに任せよう。

運が良かつたら早めにこの世界から退場つて事になるかもしない。

そこまで考えたところで声がかかつた。

「後どれくらいで着くわかるか??」

順だった

この頃なんかやたらと俺を頼つて来る。

「時間的に考えるとあと2時間ぐらいで着くはず。」

それを聞いて拓也は綾の元へ行く。

マジで、いつからあいつらあんな仲になつたんだろうな。

相変わらず拓也と朋美は一緒にいるし……。

優華は俺の知らない女の子と一緒にいる。

…………ハミられた…………。

「もう少しで着くから降りる準備をさせや。」

1時間ぐらいたつてからフランス語で男が俺に喋りかける。

それから1時間ぐらいで西院学園に着いた。

今から2時間猶予をくれるらしい。

その間にまず家に帰れと言つ伝言を伝えた。

グランドには今はもう生徒はない。

俺は家に帰つて、まず風呂に入り、荷物を全部まとめた。まだ30分もたつていない。

少し寝る……かな。

……寝過ごした。

集合時間から2時間もたつてゐる。急いで学校に行つてみると誰もいなかつた。いや……1人だけいた。

「久しぶりだな。漣亮。」

「……ティル・グレゴリー。」

ちなみにこいつは俺の知り合い……元仲間だ。たしか今は……スペイン軍にいるはずだ。

「ここはイギリス領だぜ??」

「ああそうだ。だからなんだ??イギリスとスペインは同盟国だ。何しに来たんだよ??」

「イギリス軍から連絡が入つてね……漣亮らしき生徒が西院にいるつてね。」

「今さら何の用だよ??チームは解散したはずだけど。」

「久しぶりに顔でも拝んでおこうと思つてね……『黒き征伐』と呼ばれた男の顔をね……。」

「……。」

「ちなみにお前が一緒に行くはずだった生徒達は今、港にいるだろう。確かにイギリス領のテューダに連れて行かれるはずだ。」

「……。」

「安心しろよ。……確かに俺とお前は『あの日』を境に敵になつた

が、この情報は嘘じやない。」

「なるほどね……。他の元チームのメンバーを集めて俺を殺そうとしてる頭はお前か。」

「大丈夫だ。まだ殺しはしないさ。果実は熟した方が旨いんですね。」

「それはそうと急がないと船が出るぞ。正門に停めてある俺のバイクを使えよ。」

それを聞いた俺はすでに走り出していた。

今は元チームより大切な事がある。

……イギリス軍に入れれば俺の情報があいつらに知られちまうと思つたけど、もう遅かったか……。

### 第30話・過去

港に着くと船が出発する瞬間だった。

ギリギリセーフ。

拓也によると俺を30分ぐらい待つたらしいが、ティルが来たのでティルに任せて先に出たらしい。

「知り合いなのか？」

「ああ……昔……な。」

「また昔ですかあ？？」

「……」

船に乗つて拓也に説明してもらつた瞬間に順と綾に言われた。優華には殴られた。

「遅い！！！かなり心配したんだから！！！」

と言つて。

「それよりよ…………そろそろいいだろ。」

「…………過去か？？」

拓也のせいいでいきなりシリアルスマードに突入した。船に乗つている西院の生徒が皆、俺の方を向く。

「わかつたよ…………これ以上隠すのは無理そうだ。」

そう言つて俺は話しおした。

3年前……この世界には全ての戦争の根元とも言えるトラファリアと言つ国があつた。

その力は強大で、他の国全てを圧倒した強さを持っていた。

トラファリアの隣にはフェアルリアと言う小さな国があつた。

トラファリアはフェアルリアなどいつでも潰せると言つ事で、フェアルリアには何も干渉していなかつた。

そこで俺は暮らしてゐた。

デイルファリア生まれだが、親父が優れた軍人だつたらしく、フェアルリアにスカウトされたらしい。

もちろんそこに行くまでにいろいろあつたらしいが、俺は知らない。

俺は毎日親父にくつついて剣術を習つた。

毎日毎日、練習をした。

俺が14歳のある日、親父が殺されたと言う連絡をもらつた。母はショックで数カ月後に死んだ。

親戚も何もいなかつた俺を親父の同僚が引き取つてくれた。

その後、俺は誰が親父を殺したのかを独自に調べた。親父を殺したのは、トラファリアの暗殺部隊だつた。

俺はその日を境に人を集めた。

弱冠14歳だつたにもかかわらず、24人が集まつた。

俺を含めた25人で俺は最強の部隊を作る事にした。

まだ14歳だつた俺の代わりに実際に指揮をとつたのは、当時25歳だつたデイル・グレゴリーだつた。

俺達は強くなる為に、世界中を旅した。

世界中の犯罪者を相手に俺達は強くなつていつた。

俺だけは、強さじやなく、協力者を探した。

1年後には、俺達はかなり強い部隊だつた。

各国からのスカウトが毎日の様に來た。協力者もかなり得た。

世間では俺達の事を黒いコートを着ていたので『漆黒の死神』と呼んだ。

そして、そのトップである15歳の少年を『黒き征裁』と……。

そこで俺達は本来の目的を果たす事にした。

元々、トラファリア潰す為に集めたチームだ。

そして、1年前の冬、俺達は作戦を実行した。

トラファリアは完全な王政だ。

王を殺せば軍隊にも迷いが出る。

軍隊が機能しないとなれば、周りの国が一斉にトラファリアを潰そうとするだろう。

これが、俺が立てた作戦の大体の内容だ。

途中まではかなり順調だった。

城に忍び込み、近衛兵を次々と機能停止にした。

そして、負傷者ゼロで王がいる部屋までたどり着いた。

あと少しで親父の仇を討てる。

そう思つて俺は扉を開いた。

そこには王と一緒に親父がいた。

俺は訳がわからなくなつた。

指揮が執れない。

周りが真つ暗だ……。

気付ば困まれていた。

「亮！……どうするんだ！……！」

ティルの叫び声が聞こえる。

「亮……お前もこっちに来るんだ。」

親父が叫ぶ……。

「亮……お前も本来はこっちの人間だ。」

親父が叫ぶ……。

「」

何も聞こえない。

### 第31話・キス??

船の上には沈黙しかなかった。

完全な沈黙。

物音一つしなかつた。

「その時の俺は親父が生きていると知つておかしくなつていた。そして、目的であつたトラファリア王を目の前にして俺はチームの解散を言い渡したんだ。」

まだ沈黙は続く.....。

「その後は気を失つてわからない。俺が気付いたときには、王の死体があつた。.....そして、親父はいなかつた。」

まだ沈黙は続く.....。

「こんなもんかな??なんか聞きたい事あるやつ??」  
この気まずさ最上級の空気をなんとかする為に俺は質問を受け付ける事にした。

「テイル・グレゴリーは何でお前の敵になつたんだよ??」

「ああ、それを話してなかつたな。あいつは元々、古代3国のスペイミたいなんだつたんだよ。俺を利用して、トラファリア王を殺したんだよ。それで、何か知らねえけど元チームの奴集めて俺を殺しだがつてるんだよ。」

「お前の親父は??」

「さあ??わからねえ。」

また沈黙ができた。

やっぱ話すんじゃなかつたぜ。

「それより『漆黒の死神』と『黒き征裁』って知らねえのか??」

「.....知つてゐに決まつてゐだろ。トラファリアが潰れた裏話にほとんどの伝説として知つてゐる。」

拓也がやつと喋つた。

なんか一安心。

「じゃあもつとなんかねえの？？『ほんとに黒き征裁なの？？す』  
『い。』とか言う歓声が上がると思つたんだけどな。」

「本気で思つてたのか？？」

今度は順が喋つた。

ついでに睨まれたけど……。

「そろそろ、自分の部屋に戻れ。」

ちょうどいいタイミングでイギリス兵が言つた。

今回は徵兵として行くのだからちゃんと部屋もある。  
皆がそれぞれに部屋に入つて行く。

「漣亮。ちょっと来るんだ。」

つて事で俺は呼び出された。

イギリス軍の中佐か大佐か知らないけどそいつに俺の過去が本当な  
のかを聞かれて、いろいろ喋らされてやつと帰る事ができた。

部屋に着くと、扉の前に優華がいた。

「久しぶりにセリフありのトージョーをした優華ちゃんです

。……。

「部屋には上坂も安永もいるんでしょ？」

「ああ。たぶん寝てるけどな。」

「ちょっと付き合つてくんない？？」

つて事で甲板に行つた。

「亮つてあの『黒き征裁』だつたんだねえ。これでいろいろ説明つ  
くよ。」

「悪いな。黙つてて。」

「いいよ。タダじゃ許さないけど。」

優華は花の咲く様な笑顔を浮かべて俺に寄り添つ。

なんで優華と2人で喋つてるとラブコメ方面に行つちゃうか

な??

「で、何か用あるんだろ??」

「別に……。ただ喋りたかったのよ。」

「は?? 何だよそれ??」

「恋する乙女のささやかな希望です。」

「たく…… いつ見ても可愛いんだよ……。」

「引くなよ??」

優華の前にいたらどんな男でもそう呟つって。

「亮つてさ、何人彼女いたの??」

「…… またそつち方面に話題が行くのか??」

「だつて興味あるもん。」

「…… 3人。」

「嘘だ。」

「嘘じやない。」

「じゃあちゅうは??」

普通女の子がこんな事聞くか??

「…… そんに知りたいのか??」

「…… やつぱやめとく。聞いたらブルーになりそつ。」

「キスしてやるうか??」

ちなみに下心無しの冗談だけで構成された台詞だぜ。

「や～だ。えつち!!!!」

拒否された。

「…… やつぱりしようかな??…… キス。」

え～と…… 絶好のチャンス到来??

「でもなあ。」

「何だよ??」

「亮、今彼女いるでしょ??」

「は?? 誰がそんな事言つてるんだよ??」

「女の勘です。」

「……」

「いね～ぞ？？」

……なんでそんな疑う田を向かうるんだよ？？

「じゃあいないってわかつたらしてもいい」

「わからせなきゃダメなのか？？」

「そう。わかつたらキスだけじゃなくてその後もまかせるから

優華はそう言つて走つて行つた。

「

今田からひいりせつて分からせるか説まなきゃなんねえなあ。

……。

えーと、みなさん初めまして、雁原優華です。  
今回からちょっと事情があつて亮の代わりに私が『語り部』だつける事をする事になりました。

事情つて言つのは、亮だけ訓練生じゃなくていきなり第一線で戦うらしいのです。

正直かなりシヨツクです。

あのキス騒動があつた次の日から亮はもうこの訓練所にはいません。あれから2週間ぐらいたつて私達もやつと訓練所での生活に慣れてきました。

学校でやつていた事を派生させた授業ばかりだからけつこつ楽です。上坂とか安永なんかいろいろ教官よりできるらしいです。

ちなみに私も朋美も綾もけつこつ出来てます。  
しかも、この訓練所は設備がかなり充実してるので、平均生活水準よりかなりいい暮らしをしています。

心配事と言えば、お父さんとお母さんの事ぐらいです。

私のお父さんもお母さんも学者っぽい事してたから、戦争に直接行く事はないらしく、新兵器の開発とかしてるらしいです。

以上、現在の近況報告終わり！！

「優華。ご飯行くよ。」

なんと！…そこにグットタイミングで朋美から声がかかりました。  
……なんか語り部つて難しいなあ。

「ちよつと待つて！！」

あ、ちなみに朋美と綾と私で1つの部屋です。

「今日は何食べましょうか。」

こつ見えて綾はかなりの食いしんぼうさんです。

「やう言えば明日からテストなんだっけ？？」

「らしいわね。噂じや靈獸と戦うらしいわよ。」

ちなみに朋美はこの情報を教官室で聞いたらしいです。

靈獸は前に亮と一緒にたおした事あるから結構自信あります。

「どこへ行つてもテストはありますねえ。」

「やだよねえ。不合格とかだつたら補修あるのかなあ？？」

今日の昼ご飯はスペゲッティにしました。

朋美は私と同じで、綾はパフェも食べた。

今日は午後から講義がないから食堂で他の女の子達と4時ぐらいまでいろいろ喋りました。

あと2時間ぐらいで晩ご飯じゃんか。

「今日は先にお風呂行く？？」

「私は晩ご飯の後がいいですう。」

「私も後がいい！！」

つて事で晩ご飯の後に決定。

それまで部屋でトランプしました。

ちなみにお風呂のシーンは教えません。

期待していた方々ごめんなさい。

でもいたつて普通のお風呂だつたから女性の方ならわかりますよね

？？

後は特に変わつた事もなかつたし、普通に寝ました。

### 第33話・テスト

いきなりですが、今日はテストです！！！

今日を乗り切つたら待つてるのは3日間の休暇です。

ちなみに私達は第4トレーニングルームでテストらしいです。

朋美によると、昨日の男子のテストで上坂は最高得点を出したらしいです。

ちなみに安永は3番目。

亮がいたらどれくらいなんだろうなあ？？私の試験が始まったのは11時ぐらいだった。

私の3人前に綾は終わってたからアドバイスをもらつた。  
かしこくない靈獸らしいからちょっと頭を使えばすぐに勝てるって言つてました。

私の相手の靈獸は鷹を大きくした感じの靈獸だった。  
つてか飛んでるし……。

優華ちゃんちょっと放心状態……。

そんな呑気な事考えてたらいきなり靈力弾を口から出した。  
避けたところに突つ込んでくる。

しかも翼に靈力を込めてあつたから靈力壁がやぶられた。

「……つ！」

剣で翼を受けて右足を跳ね上げる。

脇腹をかすつたから少しバランスが崩れながら飛び上がるうとするところに今度は左足でキックする。

……今度は避けられた。

学習能力あるし……。

頭いいじゃんか、綾のバカ。

綾に怒つてゐるうちに靈獸は今度は靈力弾を大きくし始めた。  
飛んでるから剣は届かないからなあ。

まあやるうと思つたら出来るけど。

やつぱりやめて靈力弾を撃つた。

かなりのスピードを出したので大きくしている靈力弾に直撃した。

その後に爆発。

うわあ。痛そう。

あ、墜落した……。

てかまだ生きてるし……。

もう優華ちゃん容赦しません。

つて事で突っ込んだ。

剣を振り下ろすと同時に靈力弾を上に向けて撃つ。

靈獸は目が見えなくなつたらしくて、靈力に反応して動いた。

残念ながら私はあなたの目の前にいます。

モロに剣が頭に直撃した。

奇声を出して靈獸が横たわる。

「雁原優華試験終了。」

アナウンスが鳴つてドアが開いた。

やと終わつたあ。

「お疲れ様です。」

「どうだつた？？」

「飛んでた。」

「鳥型だつたのかあ。」

「それと学習能力あつたよ？？」

綾に向かつて舌を出す。

「私は学習能力なかつたです。」

相変わらずマイペースだなあ。

ちなみに3人ともテストに受かりましたあ。

## 第34話・電話

今日から待ちに待つた3日間の休暇です！！！

1日目の今日は朋美も綾もデートって言つてたから部屋でゆっくりしそうかなあって思つてます。

明日は3人でお買い物つて予定。

明後日は何も決まって無いけど……。

朝早くに朋美と綾を送り出したらかなり暇になつた。

いいなあ。デート。

ちなみに相手は上坂と安永。

いつのまにか綾と上坂がそういう関係になつてました。

こういう時に亮がいたらなあ……。

つて思つたら悲しくなるから思考停止。

恋する乙女はツラいですねえ。

この気持ちは男性にはわかんないです。

そう言えば成績のいい人は来週から訓練を終わつて、第一線に出るらしい。

私もそう言われた。

正直に言つとヤだ。

どうせなら私もお父さんやお母さんみたいに新兵器の開発つて方面に行つたらよかつたかなあ？？

そんな事を考えてたら部屋の電話がなつたん。  
施設内の番号じゃない……。

「はい、もしもし。イギリス軍訓練所の302号室ですが？？」

何気に緊張した。

「優華？？私よ、朋美。」

「朋美？？」

「や、公衆電話からかけてて。」

「どうしたの？？」

「拓也と晩ご飯食べて帰るから綾と先に食べてて。」

「……相変わらずラブラブですねえ。」

もちろん皮肉。

「はいはい。ラブラブですよお

なんかスッゴい腹立つなあ。

今からふて寝しようかな??

そう思つたらまた電話が鳴つた。

また朋美??それとも綾が同じ内容で電話かな??

「はい、もしもし!!」

自然となんか怒つた感じになつた。

「もしもし。優華??何怒つてるんだよ??」

「へ??亮??」

なんと亮だつた。

優華ちやんビッククリ。

「何怒つてるんだよ??欲求不満か??」

「つ、うるさいなあ。」(うちにも事情があるのです。つてか最近どうなのよ??)

ちょっと無理矢理話題を変えてみた。

「絶好調かな??3日で部隊長になつたし。」

「部隊長??3日で??」

どうやら『黒き征裁』は健在らしいです。

「初陣で相手の大将の首とつてさ、以外と簡単。」

「普通は簡単じゃないの。」

「優華はどうなんだよ??」

「私??私は後1週間ぐらいで第一線に出るらしいよ。」

「1週間か……。ギリギリかな??」

「??何が??」

「他の奴らは??」

質問無視。

「みんな同じ様なものだよ。1週間後が最速。」

「そつか……。で、今何してるんだよ？？」

「朋美と綾は上坂と安永とデートで、私は自分の部屋で留守番。」

「留守番かよ。暇人だな。」

「つるさいつ！寂しいんだから帰つて来るまで付き合つてよ。」

「はいはい。わかつたよ。」

「それから綾が帰つて来た6時半までずっと電話してた。」

「優華もデートでしたかあ。」

つて突つ込まれた。

今日はとてもいい日でした。

### 第35話・帰還

昨日は私にとつても朋美にとつても綾にとつてもいい日だったから今日の買い物は3人共かなりご機嫌だった。  
ちなみに朋美は夜の10時に帰つて来た。  
ちなみに何してたのよ……。

第一線になると休暇があつても自分のしたい事ができないらしいから今日は今まで最高にはつちやけようつて事でかなり騒いだ。  
昼ご飯食べるのとか忘れてたし。  
ちなみに今はファミレスで晩ご飯。

「明後日から何の授業するんでしょうかあ？？」

「軍の規律とか上下関係とかいろいろあるらしいよ？？」

「へえ～。相変わらず朋美はよく知ってるね。」

「私達は女性軍に入るんでしょうかあ？？」

「そりあそうでしょ。」

「実力がすば抜けてたら女性軍とか関係ない將軍になれるらしいけど。」

亮が簡単に出世してくるからきっと実力重視なんだろうなあ。

「どの辺に配置されるんでしょうかあ？？」

「さあ。まだそこまでは分かつてないばず。」

「お2人さんは彼氏と離れる心配しないといけないから大変だねえ。」

「皮肉つてみました。」

「優華だつて漣くんいるじやない。」

「亮はそんなんじやない……ばず。」

「でも、昨日ずっと電話してたみたいじやないですか。」

「……暇だつたんだもん。朋美みたいに夜までいちゃいちゃする相手いないからねえ。」

「別にいちゃいちゃしてません！――」

「じゃあ昨日夜遅くまで何してたんですかあ？？」

「そ、それは……。」

「そんなん決まってるじゃんか。」

「やっぱりホテルですかあ。」

「そうそう。お淫らしてたの。」

「う、うるさいなあ。別にいいでしょ。」

「ついに開き直っちゃいました。」

「朋美もやる事やってるんだね。」

「そんなんだつたら綾もでしょ？？」

「…………いきなり私に振らないで下されよお。」

「綾もお淫らしてたの！？」

「え……まあ。はい。」

綾は照れながら言つ。

何よお。2人ともそんな事してるの？？

こつなりや亮に告つちゃ おつかな。

まあ、さすがの2人もその「デート以来」「デートっぽい」のはしないで1週間を過ごした。

1日1日でどんどん緊張感が高まつていいく。

明日はまず本部に集まつてそれから軍分けするらしいです。  
ヤだなあ。

訓練所で過ごす最後の夜に元西院のみんなでお別れ会みたいのをした。

みんなでお菓子食べて、騒いで、これで最後だからなあ。  
突然電話が鳴つた。

「はい？？」

1番近くにいた上坂が出る。

騒ぎ過ぎって電話かな？？

「うようと聞いてくれ！！」

受話器を置いて上坂が叫ぶ。

真剣な顔をしているからみんな黙つた。

「今からここに軍のお偉いさんが来るらしい。  
「今から??もうこの施設にいるのかよ??」  
「これは安永のセリフ。

「ああ。今、向かつたつて。」

。 。 。 。 。

沈黙が流れる。

その瞬間ドアが勢いよく開いた。

黒いコートを着た男が立っていた。

静寂を破つたのはその男だつた。

「イギリス軍本隊大將軍護衛隊長の漣亮だ。」

なんと亮でした。

### 第36話：『黒き征伐』直属兵

お待たせしました。全国の漣亮ファンのみなさん。  
お久しぶり。

やつと帰つて来ましたよ。

優華の語りだとつまんなかったでしょ??  
まあ安心して下さい。

今日からまた俺が語り部です。

つて事で漣亮復活!!!!!! みたいな。

「どう言う事だよ?? お偉いさんつて亮なのか??」

再会の喜びなんか味わう暇もなく拓也が突っ込んだ。

「言つただろ?? イギリス軍本隊大將軍護衛隊長つて。

「何なのそれ??」

「王直属の近衛隊長の將軍版みたいな感じ。」

「軍のトップの護衛つて事ですか??」

「そうそれ。綾ちゃんは物分かりがいいな。」

「じゃあ何しに来たんだよ??」

.....。

なんか責められてないか??

「昨日付けで俺は今の地位に就いたんだけど、將軍の護衛隊長つて  
事は俺直属の兵隊がいる訳だ。」

「.....だから??」

「その兵隊は俺の独断と偏見で決めれるんだけど.....。」

「.....それを俺達で隊を作りつて事か??」

「そうそう。いきなり一般兵じゃなくて近衛兵だぜ??」

それからいくつか質問をされて俺と一緒に来る奴は2時間後に準備  
して大広間に集まるように言つた。

もちろん訓練期間が終わつてなくても俺の権限でなんとかすると約  
束した。

「……亮……。」

「……どうしたんだよ？？優華？？」

「IJの前電話で言つてたのつてこれ？？」

「ああ。あそIJで言つてたらお前達氣い抜いてしつかり訓練しなかつたはずだからな。」

「ふうん。」

「それより早く準備して来いよ。」

「……行かないつていつたらどうする？？」

「お前は強制だ。」

「きよ、強制？？」

「どつちにしろ拒否するはずがないだろ。」

「ん~。なんか亮の計画通りつて感じだなあ。」

「計画通りだ。」

つて事でまず1人は確保。

まあ全員来ると思うけどな。

それから1時間で全員が来た。

まあ予定通りだから大して驚きはしなかつた。

「で、今からどつか行くのか？？」

「今から本部に向かつ。手続きとかいろいろあるからな。」

「本部まで何で行くのよ？？」

「飛行機。」

つて事で本部へ直行。

「亮の奴マジですっげ~スピードで出世してるよな。」

「ああ。絶対おかしいぜ、つここないだまで靈力使えなかつたのによ。」

「さすがですねえ。」

「亮のくせに結構すこい。」

とか何だか後ろから聞こえてきたけど無視。

今更俺の凄さに気付いても遅いんだよ。

次の日、朝一で部隊登録をしに行つた。

もちろん俺は部隊登録なんてしなくてもいいので、イギリス大将軍であられるフェルナンド将軍に報告をしに行つた。

かなり怒られた。

さすがに自分の護衛が全員訓練生から引っこ抜いて来た奴だつてわかつたら怒るか……。

最終的には納得させたけど。

大将軍の護衛つて言つてもフェルナンドは24時間体制で本部にいるだけだから実際は現場監督みないな役に就くんだけど。

つて事で今から戦場に向かいます。

拓也達はどうやら戦場には行かないと思つてたみたいでかなり文句を言われた。

「俺達は最後尾だから。」

つて言つたらいくらかまつしになつたけど。

ちなみに俺達が行く戦場はラオックスつて所。

まだまつしな戦場だ。

何とかつて言つ名前の将軍2人の部隊が総出してるらしい。現場に着くなり拓也に俺の部隊の全指揮をまかせた。

「…………そんなんでいいのかよ??」

「だつて俺は今から全隊の指揮取らなきゃなんね」から。大体今日は初めてなんだし現場の空気とかに慣れとけよ。」

命令つて事でつて言つたら文句を言わなくなつた。

……やっぱりトックつてのはいいなあ。

で、俺が将軍の所に行くのにお決まりの5人が付いて來た。

「だつて現場の空気慣れなきやいけないじやん。」

「そうですよお。見学ですか。」

「命令違反じやないしね。」

「やつぱり隊長を見て覚えね～と。」「

「亮の言いなりになつてゐるの釈だし。」

らしい。

ほつとこいつ。

「現状を教えてくれ。」

將軍テントに入るなり俺は言った。

「川を挟んで対峙しています。右翼と左翼に2万ずつ。中央に3万を隊列を組んで並ばせています。」

「地形は？？」

「こいつちの陣の方が2、3メートル高いです。」

「右翼と左翼を1万ずつにしろ。あと中の隊列を曲線状にしといて。」

それを聞いて將軍2人は出て行つた。

「お前らもここじやなくて戦場見てた方がいいぜ。」

「……。今、指示した陣型の意味がわからんね～んだけど。」

当たり前だ。

今日戦場に立つたばつかの奴にわかれれば作戦もくそもないだろ。

「配置し終わりました。」

「1回目の場合で陣型を崩さずに中央の歩兵を2万、2回目で左右の騎馬隊全隊、3回目でまた中央の2万を前進。詳細は前の打ち合わせ通りだ。」

「はい。……しかし、本当にあんな作戦が通用するんでしょうか？」

「無茶苦茶だろ？？」

「はい……。」

「だからこそ……だ。」

それから10分ぐらいすると敵が動きだした。

敵の陣型は5万の歩兵が前、3万の騎馬隊が後ろだ。

まずは歩兵が3万弱、次に騎馬隊が1万弱動き出した。

今日が初陣の俺の部隊はかなりソワソワしている。

敵がどんどん近付いて来る。

200メートル…… 150メートル…… 100メートル……。

「今だ！……」

味方の歩兵が合図と共に動き出す。

敵の方が動き出したばかりの味方より勢いがある。

敵が次第にこっちの陣型である曲線に合づ形になつて来る。

「2回目。」

そこで騎馬隊が出る。

騎馬隊は敵を無視してそのまま真っ直ぐ走り抜ける。

「お、おい！！！敵を通り越したぞ！！！」

順がたまらず声を上げた。

無視……。

敵の最終ラインまで突つ切つた騎馬隊はそこで方向を変えて合流する。

「3回目。」

また歩兵2万が前進する。

「拓也。全員に馬が用意してあるから準備させといてくれ。」

「出るのかよ！？」

そう言いながら拓也を始め、5人は出ていく。

ちなみに今の状況は味方が敵を囲んだ状態になつていて。

ちなみに本陣を守る兵がかなり少ないし、兵隊を移動させ過ぎてる。

常識的に考えるとありえない作戦だ。

まだからこそ……だけどな。

もちろん俺の作戦通りに進んでいて、ラオックス軍はかなり動搖してるらしい。

護衛軍が出る必要は全く無いんだけど、見てるだけじゃ緊張感を感じるはずがないからちょっとカマかけてみただけ。

つて事で我が部隊の初陣はかなり楽勝で終わった。

まあ俺がいる限り誰が来ようと余裕だけどな。

それから2ヶ月で俺達はラオックスを全域制圧した。

4回の内2回だけ護衛隊は実際に戦つた。

その2回で拓也と順は圧倒的なコンビプレーを見せた。この2人は違う部隊に入れた方がいいかも知れない。そうすればかなりのスピードで出世するだろう。

すぐに俺に追い付いてくるはずだ。

……なんか不満。

あの2人が抜けたらだいぶダメージがでかいから手放すつもりはないけど一応言つてみるか。

「俺は今に不満がないから別にいい。」

「俺も。不満出てきたら言つさ。」

らしい。

よかつた、よかつた。

正直、『元チーム』に対応できるだけの力を持つた『チーム』として独立するつもりだ。

あるいはイギリス軍のトップに立つか……。  
まあそれじゃあ時間がかかりすぎる……。

それから1ヶ月後に俺達はトールコーナーに遠征する事になった。

目的は人材の採掘。

トールコーナーを中心としたガンデンズ大陸はこの間イギリスの傘下に入つたばかりで優秀な人材がいるかもしれないらしい。人材採掘と言つても結構難しい作業だから俺はてつとり早く学校を作る事にした。

優秀な成績で卒業すればキャリアとしてイギリス軍本隊に直接配属

されると書つ名田の元にかなりの人数が集まつた。

学校の名前は黒征学園。

もちろん『黒き征裁』からとつた。

黒征学園は拓也に任せて俺は優華と2人で学校に来れなくて埋もれている人材を採掘しているところだ。

なぜ優華と2人かと言うと……まあ学園の講師に人数を割かないといけなかつたし、人の方が行動力が上がるからだ……と言う事にしといてほしい。

まあ他にも理由が無かつた訳じやないけど……。

とにかく2人だつたので、2ヶ月でガーデンズの半分を調べ終わつた。

何人かを黒征学園に行かせる事にも成功した。

「疲れたあー。もうだめ。亮が私を奴隸同然に使うからへとへと。」  
ちなみに今は休む為にホテルの一室にいる。

「人聞きの悪い事言うな。今日は大して何もしてないだろ。」

「…………前から思つてたんだけさ。」

「何だよ??」

「このごろ亮、冷たくない??」

「…………別に変わつてないだろ??」

「そんな事ない!! 絶対冷たくなつた。冷たいつてか冷酷つて感じ。」

まあ『黒き征裁』だつた頃は自分でも俺つて冷酷だなつて思つたけどな。

「そんな事ね~よ。普通だ。」

「…………ま、いいけど。それより今日は一緒の部屋なの??」

「…………空き部屋が無かつたんだぜ?? 勘違いしないこと。」

「そんな事言つちゃつてさ~。」

「じゃあするか??」

「何を??」

「今、優華が考えてた事。」

「…………まだ彼女いないって証明されてないからヤだ。」

真剣な顔して答えやがつた。

「…………まだかよ。」

「早くしたいんだつたら証明しなさい。」

「どうやって証明すればいいんだよ？？」

「自分で考えてないと意味ないの。」

「なんか疲れるな…………。」

実際、証明できてないから俺と優華の間にまだ何もないうはす。

そんな呑気な事考えてたら電話が鳴つた。

「はい？？漣です。」

優華が勝手に出やがつた。

「いろいろやせこしくなるからやめよう。」

「亮。上坂。」

拓也かよ。

「もしもしし？？何だよ？？」

「亮か！？ひょっとマズい事になつた。今すぐ帰つて来てくれ。」

「つて事で今すぐ帰らなきゃなりねえ。」

優華と2人でイチャラブな夜を過いす事はできなくなつた。

残念だ…………なんつつて。

### 第39話・転機

黒征学園に着くなり俺は拓也がいる校長室へ行つた。

「何があつたんだよ？？」

「本部から電話があつたんだよ。少しマズい報告だ。」

「こんな時に何してるんだよ。」

「なんか重大な事決めるんだつたら俺は呼ばれるはずだ。」

「イギリスが決めたんじゃないんだよ。フランスとスペインが古代3国同盟を破棄して新しい同盟を作るらしい。」

「は？？……訳わからんねえよ。」

「まあイギリスはかなり領土手に入れたからなあ。フランスとスペインが危機感感じたんだろう。」

「……。」

「そろそろか……。」

「優華。全員に招集をかけてくれ。」

「拓也。今日から3日間休校だ。全生徒に連絡してくれ。」

2人はそれを聞くなり部屋を出ていた。

俺は今から本部に電話でもするか……もちろんイギリス軍を抜けるためだ。

もちろん皆にもしもの場合イギリス軍を抜けると言つてある。

黒征学園は違う奴に任せるとしかない。

もちろん候補も決めてある。

「……。」

正直こうなる事はわかつていたけど思つていたよりかなり早かつた。

予想外……いや、予定外か……。

「招集したよ。」

優華が帰つて來た。

「できる限り説明してくれ。」

「ん。」

「……ん。 つて何だよ？？」

それから電話をし終わって、後を任せた人材もきちんと確保した。皆が集まっている場所に行くと拓也もいた。

つて事は説明しなくて済むのか…… よかつたよかつた。

黒征学園も大丈夫だし、後は自分達の事かそろそろ……。

「航空機ならもう用意してあるぜ。」

「サンキュー。順。」

あとは目的地か、フランス、スペイン領土はもつての他だし、イギリス領土もマズいよな。

結局、皆で相談した結果古代3国の影響が全くないワイクランドへ行く事にした。

ちなみに今は飛行機の中。

操縦は順と拓也がやつていいはずだ。

「ワイクランドってどんなところなんですかあ？？」

「知らない。聞いた事しかないもん。」

「じゃあ漣くんに聞こう。」

つて事で女の子3人が聞きに来た。

「世界のど真ん中だよ。」

「？？」

端的に答えたなら3人共？マーク浮かべやがった。

「この星のど真ん中なんだよ。」

「人は住んでるの？？」

「当たり前だろ。」

「他と何も違わないの？？」

「ああ。靈力でできただでつかい洞窟があるらしいけど。」

「何ですかあ？？それ。」

「世界の靈力の源がその洞窟の奥にあるらしいぜ。それを壊せばこの世から靈力がなくなるってさ。」

「うつそ！…じゃあ壊しちゃえれば戦争なくなつていくんじゃない？」

？」

「その靈力の源に行くまでが大変なんだよ。」  
「なるほど……つて3人で頷いたから納得したんだろう。  
正直1番手つ取り早いのがその洞窟壊す事なんだけどな……。  
今の俺達じゃ無理だ。」

## 第40話・決意

ワイクランドには俺の昔からの知人の高波雄輔がいる。だからワイクランドでの暮りじは全部雄輔にまかせている。ちなみに雄輔は情報屋だ。

昔、ほとんどの情報は雄輔を通して貯つていた。もちろん最近も雄輔に情報をもらつていたけど。

「つたく……。なんでいきなり来るんだよ。」

「いいだろ。我慢しろって。」つて事で雄輔の家に居候。こいつはかなり金を持つて家も広すぎるから俺達全員を泊めても大丈夫だろ。

もちろんワイクランドでほのぼのしてる間にも戦争は進行してて、イギリスがスペインとフランスに攻められてかなりヤバいらしい（雄輔によると）。

それと、『元チーム』が動き出したらしく。

全員が所属していた軍を止めている。

俺達もぼ～つとしてる場合じやなくなつて来たかな??

「つたく……めんどくせえなあ。」

こうなりやあの洞窟に行ってみるかな。

靈力がなくなれば戦争の規模も小さくなるし、元チームとも決着が付きやすくなるだろ。

しかもヒーローになれるじゃん。

「例の洞窟つてどこにあるんだよ??」

「……何で??」

「行きたいから場所を知りたいんだよ。」

「行く!? それは辞めとけよ。」

「何でだよ??」

「死ぬぞ。」

「死なねえよ。」

ちなみに根拠は何もないけどな。

死んだら死んだで別にかまわないし。

「……行つて何するんだよ？？」

「靈力の源を潰す。」

「靈力源をか！？いくらお前でもそれは……。」

「いいから教えるよ情報屋！？金がいるんだつたらいいいくらでも出す。」

「……ワイクランドの北にあるタスラマ山脈にある。」

「サンキュー。たぶんこれがお前から教えてもらつ最後の情報だ。」

「亮……。」

「俺がいなくなつてもあいつらの事ようしく頼むわ。」

そう言つて俺は部屋を出た。

きつと『元チーム』も俺の行動を読んだ上で来るだろ。つ。  
思つてたより早く事が進んでる。

雄輔の部屋を出た足でそのまま拓也と順がいる部屋に向かつた。

「どうしたんだよ？？恋の相談か？？」

「ああ。かなり無理っぽい恋だ。」

「で、本当は何なんだよ？？」

相変わらず拓也は冗談に入つてこない。

「ちょっとな……。決めた事があるから既に言ひ前でお前達に言つておこうかなつて。」

「何だよ？？何を決めたんだ？？」

「あのな……。」

「ちょっと待てよ。」

話そうとした所を拓也に止められた。

「すつげえ大事な事なんだろ？？じゃあ俺は皆と一緒に聞く事にする。」

「えつ？？じゃあ俺もそつする。」

「何だよ2人して。」

「わかったよ。じゃあ今から皆を集めるから手伝ってくれ。」

つて事で皆を集めた。  
どう言う反応を示すかな  
……。

たぶん話をしたところでここに残るつて言つやつはないはずだ。  
付いてくるつて言つだつ。

それをどうやって抑え込むか……。

言わなきや一番楽なんだけどな。

さすがにそこまで酷くない。

とにかく言つつて決めたんだからはつきり言つた。

予想通りの結果だつた。

「絶好に付いていく！！！」

「1人で行くとかずるいんだよ！！！」

「1人で行くとかずるいんだよ！！！」

「1人じや行かせねえからな。」

「力づくでも付いて行きます。」

「力づくでも……か。

「…………はつきり言つたが、お前らが付いて来ても邪魔なんだよ。

「そんなに冷たく当たられても付いて行きます。」

「一瞬で粉碎された。

「わかつたよ。じゃあ付いて来いよ。」

つて事で皆来る事になつた。

洞窟までは雄輔が送つてくれるらしい。

「いろいろ悪いな。

「何言つてんだよ。あの日、お前に惚れ込んで一生協力するつて決めたんだからよ。」

「…………そうか……。それとの前言つた事ようしく頼むぜ。」

「…………ああ。」

洞窟に到着するなり皆は我先にと飛行船を降りたが洞窟に入つて行く奴はいなかつた。

「よし。じゃあここでお別れかな??」

「は??何言ってんだよ??」

「だからお別れだって言つてんだよ。お前達はここからは来るな。」

「つった瞬間抗議の声が上がりだす。

「お前達には頼みたいことがあるんだよーーー。」

「…………。」

「俺が靈力源を壊せばこの世界は少しずつ平和になるはずだ。そこで、お前達に事後処理を頼みたいんだ。」

「…………事後…………処理??」

「ああ。戦争の締結、新政府の構築、そんな事を頼みたいんだよ。」

「…………。」

「だからここでお別れだ。」

「…………ちよつと待てよ。そんなもん自分でしないよ。めんどくさい事ばっか押し付けんなよーーー。」

拓也が叫ぶ所は初めて見た。

「前に言わなかつたか??俺はこの世界が大嫌いなんだよ。」

「だから何だよ。」

「もうそろそろ退場したいんだよ。でも、ただ退場するだけじゃこの世界に負けた事になるから最後にでつけ爆弾落として行こうと思つてな。」

「…………。」

「し、死ぬ気…………なの??」

俺がこの話をし出してから初めて優華が喋った。

「かなりの規模の靈力が爆発するんだぜ??助からねえよ。」

「そ、そんな…………。」

「…………。」

「つたく…………やつきからかなり3点リーダーが多いな。」

「優華…………。」

「…………はー。」

「やつと付き合つてないつて証明する方法見つけたぜ??」

„אָלָמָּה תְּמִימָּה...“

「付き合つてくれ。」

- 8 -

お前と付き合えは証明した事になるだ？？」「

優華は黙って頷いた

術は優等のそばへがめる

豪華との距離が「ゼンゼン」近くまでついてくる。

俺は

付き合つてないって証明したらキスする約束だつたろ????」

≥ h

「これで思ひ残す事はないわよ」

「非〇八六二」

憂華が俺の腕をとる。

「何よ！死に行く

「かましれないからいいけど私はどうしたらいいのよ……！」

.....○

「それに……約束した時キスの後も任せるって言つたでしょ！！ま

だ約束守ってない!!!!

江くな

二十一  
ノルマ

「 」  
靈異  
。

「だから……だから……

「…………だから死ぬにはいいが、生きるにはどうも……」

」。」

「…………。」

「…………わかつたよ。」

優華が泣いたままこっちを見る。

「約束…………だからね。」

「ああ。必ず生きて帰つて来る。」

「うん。」

今度こそ洞窟に入らうとした。  
ティル・グレイゴーがいた。

## 第42話・別れ（前書き）

『黒き征裁』は第42話を持ちまして終了です。  
今まで御愛読ありがとうございました。

これからもよろしくお願ひします。

次の『白い暗殺者』（仮）は黒き征裁の10年後の話となります。  
『白い暗殺者』で『黒き征裁』で残つた謎とかも明かされるはずで  
す。  
よつよつと作品に対する努力しますので最後までよろしくお願ひ  
します。

ティル・グレゴリーは突然そこに現れた。

グレゴリーだけじゃなく、ほかの『元チーム』の人達も。さすがに亮もビックリしたみたい。

ここで、『元チーム』と戦つて、亮が怪我すればまだお別れなんてしなくともいいかもしない。

「よお。久しぶりだな。」

こんな時なのに亮は当たり前の様に声を掛ける。

「間に合つて良かつたよ。『征裁』がこの洞窟に入る前でね。」

「何か用か？？今から俺はひと仕事しようと思つてるんだけどよ。」

「よく言つぜ『黒色』。」

皆それぞれ亮の事を呼ぶ呼称が違う。

「殺しに来たつて言つたらどうする？？」

グレゴリーが言つた瞬間に私達は戦闘体勢に入る。

「そりやまあ、相手するしかないだろ。」

「ふつ……相変わらずですね『悪夢さん』。」

悪夢？？

「その名前で呼ぶなつて。あの呼び名あんまし好きじゃねえんだよ。」

「いいじゃねえか。俺は好きだぜ『悪夢の再来』つて呼び名。」

「……そんな風に呼ばれてた事もあつたんだ……。」

「まだまだ知らない事多い……。」

「で、マジで何しに来たんだよ？？」

「……俺達はお前を殺す前に少しでも殺しやすくなるように靈力を無くそうと思つたんだ。」

「ふうん。靈力が無くなれば俺の方が有利だと思つけどね。」

「……そして、この洞窟に来る前に雄輔から連絡があつたんだ。」

「何…？てめ～裏切つたのか！？」

「…………わざとらしい切れかたをすんな。」

「…………。」

静かになつた。

「お前を助けてくれないかつてな。」

「…………で？？」

「もちろん俺達はお前を殺したい。」

「…………で？？」

「でも今回は利害一致しているし、正直俺達だけじゃ余裕がない。」

「…………で？？」

「靈力源を潰すまでの間ならお前と協力してもいい。」

「へえ～。そ、『苦労様。』

「…………。」

「え…………と…………何？？？」の状況？？

「雄輔。」

「何だよ？？」

「俺が『いづら』と組むと思つたのか？？」

「…………ああ。」

「『冗談じやね～よ。』こんな雑魚。いるだけで邪魔だ。」

「…………『再来』…………めえ！」

怒つて動いた人をグレゴリーが止める。

「雑魚…………か…………。」

「ああ。邪魔だ。消えろ。」

亮つてこんなキャラだっけ…………。

なんか怖い…………。

「それは無理ですね『悪夢さん』。」

「ああ？？何でだよ？？」

「『征裁』一人より俺達全員の方が強いぞ。」

「はあ？？真剣に言つてんのか？？何なら『山』で試すか？？てめえら～い」とき格下が何人いようと関係ないんだよ。」

「亮…………もうやめとけって。あいつらにそれは意味ないぞ。」

えつと……1人で行くために雑魚とか言ってたって事……かな  
??

「悪いけど行かせてもらひだ。」

「……靈力源を潰すまでだぜ。」

「ああ。一時的だ。」

『暗黒の死神』再結成??

「痛つ！！」

殴られた。

「何すんのよ！？」

「帰つてきたらちゃんと癒してくれよ??」

「わかつてゐるわよ。」

その会話を最後に『漆黒の死神』は洞窟へ入つて行つた。

それから3日間たつて靈力が使えなくなつた。

それからさらに3日間、亮は帰つて来ない。

それから1週間たつてみんなで洞窟を探しに行つたけど誰の姿もなかつた。

亮……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7984a/>

---

黒き征裁

2010年10月11日22時47分発行